

浄土

浄土宗開宗八百年記念慶讃特集号



1973

5

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (別段承認制誌) 第三二五号
昭和四十八年四月二十五日印刷 昭和四十八年五月一日発行

第三十九卷 ● 第五号



『知恩院小景』

目次
表紙

——開宗八百年を迎えるにあたり——

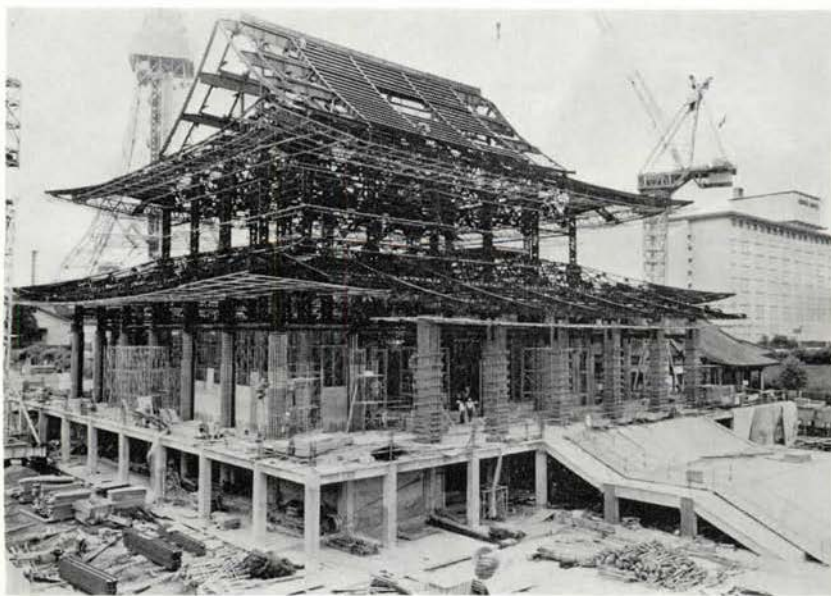
- ハワイラハイナのタベ＝開宗八百年法要の一コマ＝…岸 信 宏……(1)
- 法然上人のお徳を偲ぶ……………稲 岡 覚 順……(4)
- 祖師の心を心として……………鵜 飼 隆 玄……(8)
- 浄土宗八百年の意義と使命……………梶 原 重 道……(11)



- 法然上人の開宗の意義＝念仏の元祖として＝……………佐 藤 密 雄……(16)
- 真宗よりみた浄土宗の意義……………石 田 充 之……(20)
- 立教開宗……………(25)
- 対談『人生と仰信を語る』……………山下春江×寺内大吉……(26)
- 法然上人の御法語より『法爾の道理といふ事あり』…後 藤 真 雄……(32)
- ハワイの浄土宗……………藤 花 教 道……(36)
- 法を求めて＝開宗への歩み＝……………大 橋 俊 雄……(38)
- 心にのこる『声明の散華』浄土宗開宗八百年記念
法要より……………実 戸 榮 雄……(44)
- 華頂宮の和歌……………田 中 祥 雄……(48)



開宗八百年を迎える京都東山の霊峰



建築中の大本山増上寺新本堂の偉容

躍動する浄土宗



おてつき奉仕団



加行僧



法然上人御廟



吉水詠歌講の結集

開宗八百年を迎えるにあたり



ハワイラハイナの夕べ

開宗八百年法要の一こま

浄土門主 岸 信 宏

ハワイ浄土宗教団、北米浄土宗別院の御招待で、昭和四十七年九月二十八日、総本山を出発し、ハワイに於てはホノルルの浄土宗別院ほか、各島に散在する十三ヶ寺に於て開宗八百年の法要を修し、十月二十日に北米のロスアンゼルス

の浄土宗別院に於て同じく開宗八百年の法要を修し、ちょうど一ヶ月を要して、十月二十八日に祖山へ帰ったのである。ハワイへは宗祖の七百五十一年の御遠忌の前、昭和三十四年に渡って、各浄土宗寺院で御遠忌を奉修したのであるが、アメリカの本土へは此度初めて渡って、記念の法要を修したのである。

右のような巡錫の中で、種々の思い出もあるが、その中で私の心に深い思い出として残っている一つとして、ハワイのマウイ島にあるラハイナ浄土院の印象についてのべたいと思うのである。

ラハイナ浄土院はマウイ島の西部プウノア岬の先端の海岸、昔のハワイ王朝時代の古都に建てられてある。初代開教使齋藤源道師によって、一九一二年（明治四十五年）に創立せられた。先年一九五九年（昭和三十四年）に巡錫した時は、第七代開教師高橋俊浄師の時代であった。その後九年を

経過した一九六八年（昭和四十三年）に火災のために焼失したのである。現任第八代原源照師が直ちに再建に従事し、同院メンバーの人達、広くは日米善意の人々の協力によって一九七〇年（昭和四十五年）に、まず新本堂が日本風の様式で再建せられたのである。境内は三エーカー余の壮大なる広さ



＝ラハイナ浄土院＝

＝同院での庭儀＝



で、その中に一際目立つのは三重の塔と青銅の大仏と鐘楼とである。三重の塔は本堂と同じく日本の工匠によって作られ、日系移民百年の記念として造られたもので、日系の人達の先亡者の納骨を奉安してあるそうである。青銅の大仏は日本の鎌倉大仏を模した阿弥陀仏の座像で御身丈十二尺、台座

八尺である。この辺はよく虹がかかる所で、大仏の光背に見えることがあるので「虹の大仏」といわれているとのことである。鐘楼の梵鐘も日系人移民百年の記念に造られたもので「移民百年の鐘」と呼ばれているとのことである。

ラハイナとは原住民の言葉で熱い所という意味で、日本の「熱海」という地名によく似ているとのことである。アメリカ本土から冬季には避寒のために来る人が多く、ホテルの数も多く、日本の様式のこの浄土院は土地の観光名勝地となっているとのことである。

私共はオアフ島にあるホノルルの

浄土宗別院とハレイワの浄土院の行事と、カワイ島にあるコロアの浄土院とカパーの浄土院での行事をすませて、十月八日に、カワイ島のリフエー空港からマウイ島のワイルク空港についた。この島にはハレイワ、ワイルク、カフルイの三ヶ所に浄土院がある。八日の午前十時からハレイワ浄土院で、同日午後六時からワイルク浄土院（主任今村諡全師）で開宗八百年の法要を行い、翌九日にはマウイ島の郡長を訪問し、夕方三ヶ寺合同の歓迎晩餐会が、マウイ・バーム・ホテルにて行われた。翌十日にはカフルイ浄土院（主任新保義道師）に於て開宗八百年の慶讃大法要を行なった。翌十一日は休養日となっており、ワイルクの景勝地イアオの溪谷で、仏教各宗開教使が合同して歓迎会を開いて下さった。これでマウイ島の行事を終り、ハワイ島に渡ったのである。

ラハイナの浄土院へは八日の午前十時頃につく。山門前で各界代表者の出迎えをうけ、パンダの花のレイに飾られた輿に乗り、行列をととのえ、広い境内の中を行道し、まず大仏の前と三重の塔の前とに参拝して、回願をなし、次いで本堂にて開宗八百年の慶讃大法要を行なった。式後本堂の前で一同記念撮影をし、式を終わってからホールに於て午餐会が開かれた。清興として女の子達によるフラダンスと比嘉昌昌氏夫人の琉球舞踏があった。

ホールは海に面した浜辺にあつて、海上にはラナイ、モロカイ、カホラベの島々が浮んでいる。先年私が宗祖の七百五十年の御遠忌を修するために、一九五九年（昭和三十四年）十月二十九日に、この浄土院へ参った。この日の夕方浜辺に立つと、太陽が島々のかたへ静かに沈んで行く絶景を眺めて、次のような和歌をよんだ。

ラハイナの浜辺に立てばあかねさし陽は沈みゆく島のか
なたへ

この和歌がはからずも日系の人々に愛唱せられ、当地の大学で日本語を教えていられる横塚万知子女史（特に名を出さないようにという注意が、原開教使の手紙に書いてあったがお許しを願いたい）によって意訳せられ、それを女史の知人のアメリカ人が、次のような詩の形に作って下さったのである。

Standing on the beach in Lahaina
as the sun's crimson shaft
settles down past the distant isle

この英詩の碑が将来このラハイナ浄土院の境内に立つとのことである。私の無上の光榮とするところである。私の歌碑は日本内地に二つ立ったことを、この『浄土』誌にいつか発表したことがある。一つは私の郷里愛知県平和町の実家の

庭に「母を憶ふ」歌であり、一つは私の師籍和歌山田辺市の
県の名勝地に指定せられている奇絶峽という溪谷の山腹に、
堂本印象画伯の原画を拡大した弥陀三尊の磨崖仏をたたえた
歌とである。更に今回計らずも、海外のハワイに英詩に訳せ
られて、私の和歌が碑となって残されることはまことに有り
難いことである。

いふ
ラハイナの夕日をよみしわが歌は英訳されて碑となると



法然上人のお徳を偲ぶ

浄土宗宗務総長 稲岡 覚 順

について拙い見解を述べさせて頂きます。

法然上人のお徳を偲ぶ時、あの点この点とめどなく、そ
の偉大性の数々が浮びますが、ここでは勅修御伝の御文を通
して

- 一、智慧第一の法然房
- 二、上人求道の真剣性

御堂のほか三重の塔青銅の大仏もあるラハイナの寺

三重の塔のそびゆるラハイナの寺に詣づるえにしのか
さ

丈六の座像の露仏ましますラハイナの寺ふかき思出

三重塔影聳蒼空。(三重の塔影、蒼空に聳ゆ)

露仏奉安清域中。(露仏を奉安す、清域の中)

緑草紅花皆說法。(緑草紅花、皆說法す)

常春樂土瑞氣融。(常春の樂土、瑞氣融ぐ)

一、智慧第一の法然房

父時国公非業の死後、勢至丸（法然上人の幼名）は叔父観覺の許に引きとられますが、観覺は器量非凡である勢至丸が、辺地の塵に埋もれることを惜しみ、当時仏教の最高学府であった、比叡山に送ることを決意、西塔北谷の持宝房源光の許につかわします。その時観覺から源光にあてた送り状には、

進上 文殊像一付

と認めました。源光はこの送り状を見て、「文殊像はどこに」と尋ねますが、小児のみで像はないことを知り、この小児がただ者でないことに気づかれます。

送る観覺とうける源光との、この火花の散るようなやりとり、勢至丸の生来の聡明さが、躍如として感得されます。

勢至丸の俊敏性を知った源光は、「自分は愚鈍の身である。

碩学につけて円宗（天台宗）の奥義をきわめさせたい」と考え、久安三年四月、当時の名匠皇円阿闍梨の許に入室させました。十六歳の春から天台本書を開き三ヶ年で六十巻を読破されたと申しますが、御伝には、

恵解天然にして秀逸のきこえあり。四教五時の屏立鏡をかけ、三觀一心の妙理玉をみがく、所立の義勢殆ど師の教えにこえたり

とあります。やがて十八歳から二十四歳まで、西塔黒谷の

叡空の室に入り、勉強に努めますが、この時の模様は、

黒谷蟄居の後には偏えに名利をすて、一向に要をもとむる心あり、云々。一切経を披閱すること数遍におよび、自他宗の章疏眠にあてずということなし。恵解天然にしてその義理に通達す

とあるによっても、上人の頭脳明晰、眼光紙背に徹するありさまが偲ばれます。

二十四歳にして叡空の許を辞し、嵯峨清涼寺に参籠後、南都に下り、法相宗の碩学藏俊、三論宗の先達寛雅、華嚴宗の名匠法橋等を歴訪して、各宗義についての自分の理解を述べて、その教えを乞いますが、各学匠はいずれも、法然の理解力の深さと正しさを、称美讃歎するのみであったと伝えられます。

上人智慧第一のほまれ巷にみち、多聞広学のきこえ世にあまねし

とあるによっても、上人が如何に天才の頭脳の持ち主であり、そしてこの生来の天分を素地に、求めてやまぬ不屈の真剣性が加わって、ついに偉大な宗教改革者法然を産むに至った訳で、智慧第一の呼称が、決して偶然でないことを窺い知るのであります。

二、上人求道の真剣性

如何に恵まれた天才であっても、磨かざれば珠玉も光を發しません。出離の要路を求めようとする初心は、研学精進の過程において年と共に、その真剣さを増します。

上人黒谷蟄居の後は、偏えに名利をすて、一向に出要をもとむる心切なり。これによりて、いずれの道よりか、このたびたしかに生死をはなるべきということを、明めんために、一切経を披閱すること教遍に及び、自他宗の章疏眠にあてずということなし

とあります。即ち一切経の披閱、自他宗章疏の読破、清涼寺參籠、巨匠碩学の歴訪、あらゆる苦難の道をたどりますが、依然として求める要路が発見されません。この焦燥、やるせなさの中に、上人求道の旅路は、はてしなく続きます。

然し上人をとりまく、当時の仏教界の墮落世相の変転、庶民生活の惨状等の生々しい現実が、上人求道の炎を益々熾烈にかきたて要路を求める真剣性は、一層つのるばかりであり

ました。

当時の仏教界は、天台、真言、法相、三論、華嚴等の各派が、夫々絢爛の美を競ってはいましたが、いずれも秘密の窓に入り、觀念の床に踊るの域を出ていませんでした。而も理深く、解微なる難解難証の法門でありましたため、既に時代を離れた宗教であり、又この法門は、皇室貴族を中心とした、一部特権階級のもてあそび物と化し、仏教は墮落の一途をたどりつつある状態でありました。

他方当時の国情はと申しますと、保元平治の乱を起点として戦乱が相続き、一般庶民は兵火の犠牲の中に、不安と脅威の毎日であり、その上相つぐ天災地変のおののきの中に、右往左往しなければならぬ時代でありました。

この惨状下にあつて、生きる支えすらない大衆には、仏教はあれども、「高嶺の花」でありました。

この様な世相の中で、上人の求めた出離の路とは何であつたでしょうか。学問もなく地位もなく、そして心の支えもない眼前の大衆が、そのまま救われる教への探求でありました。上人求道の過程を一貫したならは、正しくこの一点に集約されたのであります。

「釈尊出世の本懐は、万機普益(だれもが救われる)の法門の宣布にあつた筈だ、然るに日本仏教界の現状はどうしたこ

とか。して見れば八万四千の法門の中に、何処かにこの本懐教えが、ひそんでいなければならぬ筈だ」との疑念であり、確信でもありません。

この疑念解決のため、上人の全努力は傾注されたのであります。御伝には、

○しかれどもなお、出離の道にわずらいて、身心安からず。

順次解脱の要路をしらんがために、一切経をひらき見給うこと五遍なり。一代の教述につきて、つらつら思惟し給うに、かれもかたくこれもかたし。

○よろずの智者に求め、もろもろの学者をとぶらいしに、教ゆるに人もなく、示すにともがらもなし

○かなしいかな、かなしいかな、いかがせん

○なげきなげき経蔵に入り、かなしみかなしみ聖経にむかう

等の一連の御文を通して、上人の求めてやまない不退転の決意、その真剣性が益々熱気を帯びていることが窺われます。

然し上人の真摯の求道の成果は、ついに達せられました。報恩蔵に入り、手づから自ら読み進んだ末、善導大師の観経疏のすばらしい御文が、上人求道の悲願にこたえてくれました。

た。

一心専念弥陀名号云々の御文の発見がそれであります。この御文の意味は

いつでもどこでも、ただお念仏を唱えること、それが誰でも救われる唯一つの道、それは阿弥陀さまの御本願によるからである

とのお導きであります。

この御文との出合によって、上人多年の疑念は解消し、釈尊の本懐教に触れ得た確信に踊躍歡喜しました。三十年求め続けた出離の要路は、茲に開かれました。

「感悦髓に徹り、落涙千行なりき」と自ら述懐されている通り、自らの真剣性がこたえてくれた、偉大なこの成果です。上人の感慨誠に想像にこえたものがあります。

聖道をすてて浄土へ、雑行をすてて易行へ、雑行をすてて正行へ、そして只申すことによって救われるとの、所謂選択本願の念仏の教えはここに開かれ、浄土開宗はここに行なわれました。

それは承安五年春三月、上人四十三歳の御時でありました。そして伝々ここに八百年、昭和四十九年の春こそ、正しく開宗八百年の聖辰を迎えんとするのであります。



祖師の心を心として

総本山知恩院執事長 鵜飼隆玄

法然上人は通称元祖様と申しあげております。昔から、「元祖は法然にとられ、大師は弘法にとられ、開山は親鸞にとられ」と言う言葉があります。

大師号は各宗の祖師や偉大な高僧に、天皇が諡号おくりなされた尊称で、国を導く大先達を意味し、多くの高祖が名を富めておられ、特に法然上人は唯一人七度も大師号を宣下されていいますが、それでも浄土宗以外の一般の人には「お大師参り」とか「お大師さんの日」といえば弘法大師のことと思います。

全国七万余の仏教寺院にはそれぞれ開山上人があつて、お寺を創建された僧に対する敬称でありますが、「開山聖人」とか「御開山」といえば親鸞聖人の事とされている習慣があります。

それと同じように「元祖様」といえば法然上人の事として、誰しも理解しているようです。

勿論元祖という言葉は広く多様に使用されています。

職人はじめ、菓子屋、刃物屋等の色々の社会でそれぞれの元祖があつて、店の看板に書く「元祖」号の取りあいで裁判沙汰まであつた事があります。

とにかく元祖といえは何事によらず創始者を意味して、權威の象徴とされている訳です。

それを「法然上人」の代名詞として認められて来た事は、実に尊い事であるばかりでなく、その流れを汲む私達念佛者にとっては、恒に反省と精進へのお導きであると考えております。

仏教が日本に渡来して既に千五百年以上になりますが、法然上人が浄土宗を創建されて、阿弥陀様の他力本願の御慈悲によって、唯念仏を称えるだけで有智無智、善惡を問わず全べての凡夫が浄土往生ができるとお導き頂き始めた、承安五年三月から数えて昭和四十九年が八百年目に該当して、全門業をあげて報恩慶讃の声が漲り、各地各寺に於て記念行事や事業が推進せられ参りました。

これが浄土開宗八百年記念慶讃と総称されている訳であります。

法然上人を元祖様と申上げてはおりますが、仏教伝来の歴史からいえば他に求めるべき人もある事は一応考えられる訳ですが、それでも矢張元祖様といえば法然上人を意味しているのが事実であります。

では何故と一度反問してみますと、ふだんは何の気なしに聞きながしていますが、お互いに「成程」と自答が出てくる訳であります。

それは何処の国、何時の時代でもそうですが、私達の水準以上の文化、教養に対して人は模倣性が強くない、逆にそれが人間の価値判断の基準にさえ考える錯覚に陥るものであります。

今日の若い人々が、日本人である事を忘れた様に、美語の

単語を駆使したり、中国の現代字を日本文に書いて得意がる心理と同一の事が、過去においてもくり返されたと考えられます。

だから仏教を始め、大陸文化の伝来後は専ら漢文、漢字の素読式理解が、文化教養の象徴であると考えられていた訳です。だから仏教でも印度から支那大陸に移った時は、漢文に翻訳されたのを始め、それぞれの国語に変わったものが多い中で、日本だけは經典、論釈が漢文のままで今日でも尚伝承して参りました。

随って教養が浅く文化性が乏しい原始から中古時代に於て、上層の限られた人々の為の仏教に過ぎなかったのです。平安末期から貴族の凋落、実力者武士の台頭から変革時代となり社会の混乱を続発して、庶民はその日の生活にも困窮して、生きる望みすら失ったのであります。

この史的証明は源平争乱の史実が、万人に知悉されている事だけで明らかであると思います。

こんな時代でもやはり仏教信仰による人生の導きは、大衆に無縁のものとなっていたのであります。

この混乱と困窮の時代に、法然上人は一代八十年の生涯を了えられたのであります。法然上人は幼くして父の不慮の死に遇い、その父時国公の御遺誡である、

「仇討ちする事勿かれ、若し討てば、又討たる身となり永遠に共に然敵の災いを抜け切れない、それより然親平等に救はれる仏の慈悲を求めよ」

の言葉を忘れる事が出来ず、終生求道者として精進されたのであります。

然し世の混乱と大衆の苦悩を肌感じつつ、この求道者は自己満足の学問や修行に、憂き身をやつす事ができなかったのであります。

智恵第一と称讃され、やがて比叡山の頭棟、座主の座を約束されながら、悩み苦しみて自から困苦に堪えて、尚真の道を求めてやまなかったのです。そしてその鍊苦の精進の甲斐あって善導大師の觀無量壽經の指南書「四帖疏」によって、初めて求道の花が実って、浄土宗の御開創となったのであります。

浄土宗祖法然上人が元祖様と讃仰されるには、ここで忘れてならない事が二つあります。その一には、

日本人の感覚で仏教の真体をうけとめ、

日本人の言葉と文字で

日本人の心にふれる導き

ということとです。二には変革の嵐の中に明日の生命の安全すら望めない、苦悩と窮乏の中に生きる力を失って、唯來世に望みを託そうとしていた大衆の中に、自からを投げ入れて、

共に苦しみ、共に悩み、共に求めてみ仏の本願に絶する凡夫になりきって、人々に今日生きる光を与えられた事であります。

さればこそ大陸文化丸呑みの事大主義から脱却して、日本人の主体性ある歩みを実践された事が、やがて大陸文化時代から日本文化の華開く鎌倉時代のさきがけとなられたのであります。ですから単に浄土宗の元祖であるばかりでなく、中世日本文化崇拜の基礎づけをされたとも考えられるところに、この尊称が自然に成立ったといえるのではないのでしょうか。

法然上人の四十三歳御開宗までの御熱情はいうところの革命家の情熱に等しく、大衆と共に生き、苦しみ、導く実践は何ものにも比較できない仏者の真骨頂であったと思います。

今開宗八百年の佳辰を迎えるに当ってあの元祖様の御素志を偲び、あの時代の流れを併せ考える時、私は冷汗三斗、慚愧にたえないのであります。

御開宗の御熱誠を私達は如何様にうけとらさして頂いているのでしょうか。

成程八千近い寺院と五百万といわれる信徒を有する大浄土宗教団であり、誇り高く報恩の法要を営み、堂塔伽藍の工事にいそしんで、これが記念事業なりと安心してゐるのでしょうか、反省せざるを得ません。

時代は当に人間性の危機を訴え、政治、経済、道徳、文化

の体制は日に夜をついで変革の波にくずされ、新らしき時代への移行、革命前夜の様相を呈して、人々は物豊かにして心の安らぎを欠き、生きる希望も動物的本能に傾き、自から墓穴を掘っているようです。

この時こそ、真に祖師の心に還り、その心を心とした教団の活動、信仰の実践による人造りに僧俗共に挺身すべきではないでしょうか。

単に自から信するが故に伝統慣習にことよせ、単なる形式としての信仰や、それを維持する為の利己的形態にとらわれて活きた社会の底流にうごめき、人間の活路を求めて悩む大衆と共に生きる実践を忘れてはいないかとの批判を甘受せざるを得ない事を恥かしく、申訳なく思っています。



浄土宗開宗八百年の意義と使命

浄土宗開宗八百年慶讃事務局長

梶原重道

激動とか、変革とか、七〇年の時代性を予想しながら、ただ霞のようにそれを意識しただけで、その実態をまじめに掘

七年前から総本山知恩院を中心に展開して参りました「おつぎ運動」はこの悩みと苦しみの結論として、今日的念仏者造りの運動として同信の求道者と共に、唯念仏の実践を推進して参りました。

「開宗八百年、祖師の心に還れ」

と呼ばれますが、それは何をいわんとするのでしょうか。私は敢えて申し上げます。

元祖様が新しい時代の灯として日本人の感覚で浄土宗をお開きになった素志を偲んで、他力本願の念仏を行じて今日に生き、感謝奉仕の心をもつ人を造る事こそ、元祖様のみに答える道であり又元祖の心だと信じます。

もうともせず、迷に七〇年に突入してしまつて、はや三年目を迎えた。

太平ムードとか、大衆社会的繁榮とかのかけ声に酔ったまま、そして二十一世紀は日本の世紀だとの高い評価を鵜呑みにして、うかれていた点は見逃せない。

しかし年を明けて、四大ニュースなどまとめられてみると、あまりにも昨年は重大事件の当り年だった。

何といつても浅間山荘での連合赤軍のリンチ事件や、テルアビブ空港事件などの実態が明るみにでた頃から、ようやく他人ごとではないような切実感がわきはじめたようである。

国旗をかかげて金メダルを首にはなやかな祭典としてのミューンヘンオリンピックの豪華さも、突如として起った選手村の射撃事件で気分が暗くなったし、横井庄一さんの帰還という全く夢のような事実で、人びとに驚異と歓声をあげさせたようではあったが、またその反面生き残っているという小野田さんの消息は確認されないだけに、戦いはまだ終わっていないというあの頃の嫌な思い出がわいてきた。

屠蘇気分もさめきらない元旦早々には、一人ぼっちの老人が酒に足をとられて倒れ、ひっそり死んでいたというし、孤独の老婆が焼死したとか、息子と別居していた老夫婦がガス中毒をしたなど、社会福祉の充実を金看板に総選挙の終わった後だけに、何とも云えない後味のわるい事件の連続であった。加えて総国民をテレビに釘づけにした浅間山荘のリンチの

指導者森恒夫が、罪におののき自信喪失ということでの自殺した。これとても「総括」から「粛清だった」と革命気取りでことばを変えたからといって、解決されたわけではない。

考えてみれば人間論が主として昨年度を頂点として、多角的に抬頭したというのも、こうした事件に無縁とは云えないであろう。とくに人間の回復という点に主軸をおき、人間なるものへの問い直しが、このとき人間への探りに向って深まったとも考えられる。

繁榮のなかに貧困する人間についての警告も、しばしばなされてはきたが、むしろ麻痺状態にまでなっていたのが、このときを契機として貧困する人間から、飢える魂に変わったとも云えるのではないだろうか。

したがって飢えを感じはじめた魂は、いきおい何かをあさらねばならなくなった。そこで価値観は人生というショウウインドウに、さまざまな商品となつて、陳列されたともいえるよう。

しかしそれらの根底には、民主主義なる台風は、その名のもとに暴風となり、完全な成育をとげることなく、不消化のまま多くの栄養失調者を続出していた。さらに情報界はこれまたすさまじい勢いをもって、思考を押し流して、コマ切れ

の知識の集積体を造成してきた。

同様に科学技術の躍進は新風となって、人間が生みだした科学であるにもかかわらず、その巨大化に恐れをなして、それを忘れ、わが自身の存在をさえ失うにいたったのである。

そのためにあるいは孤立化し、疎外化し、いらだち、高度成長下に享楽を満喫しながら、うつろとなり、生活の空漠に堪えかねながら、連帯性を欠くにいたったと云えないだろうか。

それでいて、高度成長の波にゆれ、繁栄下のけん然とした豪華さに、高慢が助長されていった。自主独立という民主下の名のみに溺れ、その実態への不消化は偏向した人間をつくりだしたのではなかっただろうか。

やがて耐えかねた精神は、変革へと無自覚にその激浪に乗ってしまったのである。

こうした社会の風潮なり社会心理を、私は源平争乱の時代人心に想いを移すことができる。まさに精神破壊と、変革の時代であり、社会的変動期であり、その動乱性において、むしろ再現の昭和版とさえ考えるのである。

当時法然上人は、いわゆる山岳仏教とか、貴族仏教といわれた一種の特権仏教を、時代人心救済のため野におろし、庶

民大衆化への一大転換を敢行した、これが念仏弘通の浄土開宗であった。

明四十九年には、この記念すべき浄土宗開宗八百年を迎えようとしている。そのために浄土宗あげて慶讃の諸行事ととりくんでいる。

法然上人開宗の意義は、当時における念仏弘通への原点にたちかえることでなければ、いかなる諸行事も空転に終るであろう。

あるいはこのことは、現代の複雑多様化の社会の渦中に、法然上人の念仏開宗を新しく再現することであるかもしれない。

法然上人の念仏は、人間が人間として救われる大衆仏教への開頭であったことを再確認しなければならない。前述したように社会の複雑性に鑑み、折角人間論が抬頭しながら、靴下の上から足を掻くようなもどかしさに終始した点を、いま改めて考え直すべきであると思う。

それは人間への凝視ということである。

人間の回復が叫ばれながら、人間自体へのみつめ方が足りなかった。深くさぐり、「人間さ」というもののへの自覚に欠けたのである。そこには現代へのおもいがあつた。繁栄と、科学技術の巨大性と、それらによる物量過剰の中で、

頭を冷やして人間自身をほりさげてみつめる謙虚さを失っていたからである。

中途半端な人間論は、いたづらに孤立人間となり、利己主義に陥り、連帯性を欠いてしまったにすぎない。断絶と、断層にはさまれて僅かに巖壁の一角に空虚な自己を見出したにとどまった。投身のほかになすすべも知らず、廃人に等しい人間の残骸が、それぞれ孤独化を辿ったのではないだろうか。水は冷たく、火は熱いことさえ感じえない空洞人間が続出したとも云えるであらう。

それでいて月面に旅するカプセルの中に、機械化されたような頭脳だけが冷たく光っていたのである。

云いかえれば社会の穢土を知り、厭離する知識はあったが、暖かい浄土を欣求する大切な心を忘れたのであった。

法然上人の人間観は、人間性能に立脚した凡愚への自覚であった。

このゆえにこそ、智慧第一の法然房から智者の振舞いをせずして、一文不知の愚鈍の身になしたのであった。このことは同時に利己のためにとどまらず、大衆ともろともに生きぬける強い連帯観に立っていたのである。

核化したマイペースだけでは、社会が人間の集合体であるかぎり、それはゆきづまる他にはない。大衆ともろともに生

きる連帯性の上に築かれてゆく人間への開発でなければならぬ。「願わくはもろもろの衆生とともに」と標榜し、その誓願に生きぬけることは、人間性にめざめて仏の慈悲を感得することにはじまるであらうし、またその人においてのみ可能な心境である。

自殺他殺の横行する現代の一点をとらえてみても、人間性への弱点を意識するだけでは、あるいは死を以て解決せざるを得なくなるかも知れない。しかしそれは穢土を厭離することとに気づいただけである。どうして浄土を欣求しないかに問題が残るのである。「生れがたき人身をうけた」ことへの生命尊重に気づくことのできないということは、人間なるものの本質を探ることによって、救いの世界に眼が開かないからである。

仏心を大慈悲と感ずることは、あらゆる人間に平等に慈悲の及ぶことであり、一切の人がもたらされることなく救われる世界のあることを感得することである。救いを忘れた人生は、人間の苦悩をもって終りであり、それを乗り越えて通じる道は開けない。八方塞がりのゆきづまりをもって人生を終るのである。

いかに人間はその性能の弱点にみちているからといって、その仄で終ることは生命の尊さを知らないからであり、真実

に生きることには気がつかないがゆえである。

人間の空洞を埋め、生活の空虚さを充実するということは、この真実に生きることのほかにはない。

しかもただわれ一人のみこの真実に生きることではない、あらゆる一切の人びととともに生きようとする。「願わくはもろもろの衆生とともに」生き、人間のよりよき充実のために、正しく、幸多く、かぎりなき喜びを、もろともに生きぬくために、いわば法然上人が「ただ念仏を申す」ことによって浄土宗を開かれたのである。

時代を過ごし、年を重ねてここに八百年、法然上人浄土宗開宗のご意図は、一人もあますことなく念仏によって、ゆきづまった人生を開き、弱い性能を具足した人間を救う大いなるみ心のあらわれであった。

人間なるがゆえに起る、妄念、雑念、散乱心そのままに、ただ念仏を申す生活の相続が、やがて名号の功德によって、妄念、雑念、散乱心自らやみ、自ら静まり、身口意三業自ら

調い、願心自ら生ず、とのご法語こそ現代を生きる人間としての救いであり、生活の俥力ある支柱ではないか。

開宗八百年の聖誕を迎えての、祖徳讃仰は、「ただ一向に念仏を申す」ことであり、それがすべてである。

八百年を契機として、時代とともに、人間が人間として救われ、人間が人間として生きる大道を、法然上人の念仏の教によって歩むことに、私は開宗の意義を見出すのである。

しかもそれは、われひとりのためではない、「願わくはもろもろの衆生とともに」である。大衆を離れたわれ一人の存在はありえない。この功德を以て「平等施一切」の世界顕現である。

権力でもない、抑圧でもない、「ただ一向に念仏する」ことにおいて自らひらける和順の世界である。しかも「遺法を一廟にしむることなく」「満州に辺満すべし」と訓え給うた法然上人のご意図を体し、「貴踐を論ぜず、海人漁人のとまやまで」念仏の声をひろめることこそ、開宗八百年を迎えての使命であることを、私は改めて痛感するのである。

開宗八百年を迎えるにあたり



法然上人の開宗の意義

—念仏の元祖について—

佐藤密雄

(鎌倉大仏殿高德院貫主・文庫)

昔から「大師は弘法、元祖は法然、開山は親鸞」という言葉がある。天皇から大師号をおくられた高僧は沢山あるし、法然上人の如きは、円光大師から和順大師まで数多い大師号を受けておられるが、通称は大師でなく、元祖さま、または元祖上人である。何としてもお大師さまといえは弘法大師である。各宗の開祖や寺院の第一代はすべて「御開山」さまであるが、然し、通常「開山」または「御開山さま」といえば親鸞上人のことになる。同じように「元祖」または「元祖さま」といえば法然上人を指すのである。最近では新聞・雑誌・歴史書等が法然・親鸞と呼ぶので、元祖・開山の通称がやや後退しつつあるが、然し遍路や浄土教徒の間では、大師・元祖・開山はなお根強く行われている。

法然上人を元祖というのは念仏宗の元祖の意味である。元祖と名乗る者は多い。地方の銘品や名物には元祖と名乗る家が多く、元祖が軒を並べる珍風景の見られる場所もある。日本の老舗尊重思想から来たものである。法然上人は念仏の元祖というよりは鎌倉仏教の元祖であるという歴史家の言い分もあるが、そもそも念仏往生を主張する浄土教が鎌倉仏教の始まりであるから、念仏の元祖が鎌倉仏教の元祖なのである。平安末期から鎌倉初期への年表を見ると、一一七五年に法然上人が専修念仏を唱えられ、一二〇一年に親鸞上人が法然上人の弟子となられ、一二七七年に道元禪師が曹洞宗を開かれ、此より先、一一九一年に榮西禪師が臨済宗を開かれている。ややおくれて日蓮上人は一二五三年に鎌倉で日蓮宗を開

教され、一二七四年に一遍上人の時宗の開宗がある。法然上人の浄土宗開宗から約百年の間に鎌倉新仏教である浄土宗・浄土真宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗・時宗が全部出揃ったのであって、まさしく、法然上人を元祖としている。鎌倉仏教の特徴は、国や貴族に支持されて、国や貴族の平安無病繁栄の祈願をなして来た奈良朝以来の仏教の外に、一般人が自分の祈りをなす宗教を作ったことにある。一般庶民が自分で自分のために祈りをする仏教が初めて登上したのである。それ迄の、国の立てた官寺や貴族の造った氏寺は、関係者以外は入ることも、祈りに参加することも出来ず、門は閉ざされていた。寺は国や貴族の造ったもの、僧は官の支給で育ったものであって、当然のことでもあった。然し、これ等と違った野の僧もあるにはあった。九三八年に空也上人が念仏を始められたが、これは官寺や氏寺に属せず、町を「おどろ念仏」する聖であった。鎌倉仏教の元祖、開山はその系統に属したと言える。

法然上人も比叡山で黒谷へ隠遁されたと伝えるが、それは国の官寺や氏寺の支配的地位につくための修学をやらめられたことで、聖達の集る黒谷に入られたことである。聖達も一様でないのであるが、空也上人の如きは町

を踊り乍ら、念仏を歡喜し乍ら唱えて廻り、庶民の喜捨で生活されたのである。この空也上人は、経論を背負い、法螺を吹き、鹿の角をとりつけた杖をついた異様な姿で念仏をし乍ら、町や村を廻られたが、勿論、官許の正式な僧ではなかった。この町の聖は、人々から得たものはすぐ貧民に施したとされる。法然上人の黒谷入りは空也上人の後輩の聖の集団の中に入られたのであって、これを通常は再出家の意味で隠遁といっているが、それは官寺氏寺の位階高きを望む僧達の仲間からの脱出であった。即ち自由な町の野聖のグループへの進出であり、民衆への出発であったと言うべきである。更に言えば、国が扶持して養い、給与を送って修学させ、官寺大寺の役職に任命する僧達からの脱出であった。官の給与や寺の無い、町や村の中で祈り、布施されたもので生き、余れば貧民に与えて生きる。それ故に自由に法を説き得る宗教者であった。国や大氏族の為に平安無病等を約束して、その実現の為に祈る義務を負わない宗教者であった。空也上人を先蹤とする所の、念仏についての自由仏教を実現したのが法然上人であって、これをきっかけとして以後の一世紀間に、そのような意味を持つ鎌倉の諸宗教が成立したのである。

○ 一二〇七年に念仏の行者であり町の宗教者である法然上人やその弟子親鸞上人は、旧仏教の訴えで国から弾圧停止を命ぜられて、流罪となった。私見では、官寺や大寺の僧官達が、国の養成しない宗教家で、国や大氏族の爲めの祈願をしない宗教の追放を企てて、仏教の統制を乱すことを名目とするものであった。然し、既に爲政者の中にも、一般民衆の中にも、個人の爲めの宗教として行きわたった念仏思想は、流罪中も赦免の後も浸々として普及して行つた。

○ 明年は法然上人が念仏宗である浄土宗を開かれてから八百年目になり、浄土開宗八百年の記念法要が、京都知恩院や東京増上寺を中心に営まれる。そして本年は、我々からすれば、その前奏曲として、法然上人の御弟子であり、御開山と呼ばれる親鸞上人の生誕八百年の法要が行われている。既に本年の初め以来、東西両本願寺を中心に、親鸞上人関係の出版物が氾濫し、親鸞展が各地で開かれ、三月から四月へかけて東西本願寺に参拝者が雲集している。念仏の声は京都中心に湧き立っているとも言える。明年は、いよいよ、その親鸞上人の念仏の師法

然上人の念仏開宗八百年である。今年から明年は、近年まれな念仏期を迎えたことになるというべきである。

親鸞上人は「たとい法然上人にすかさぜまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候」と述べられたと歎異鈔は伝えている。「すかされ」とは「だましわざなわれ」もしくは「おだてあげられ」の意味である。たとえそのような仕方では法然上人にすかされて、念仏して地獄におちてもかまわないと言う意味で、法然上人のすすめられる念仏をそのままに信ずるといふ信頼の言葉である。また高僧和讃の源空讃には「知懸光のちからより、本師源空（法然上人）あらわれて、浄土真宗をひらきつつ、選択本願のべたまう」とされている。浄土真宗は念仏宗のことで、選択本願は弥陀の本願の意味である。また法然上人は御法語の中で、学生骨になつて念仏を失わぬようにと注意されているが、親鸞上人も末灯鈔の消息の中で、「学生沙汰せさせたまひそうらはで、往生をとげさせまいりそうろうべし。故法然聖人は、浄土宗の人は愚者になりて往生す、と候しことを、たしかにうけたまわり候しうえに……いまにいたるまでおもいあわせらん候なり」に述べられたとされる。いささか読みにくいですが、意味は明かに知られる。「愚禿

すすむるところ、さらにわたくしなし」ともされて、法然上人の言葉を引いて念仏を勸説されたと伝える。すなわち法然上人の念仏に生きられたと言うべきである。

法然上人は「一向に念仏すべし」として、兎にも角にも念仏するように仰せられた。親鸞上人の浄土真宗は、開名して信心歓喜すれば、すなわち念仏を信すればよいとする。法然上人の弟子証空上人やその孫弟子一遍上人は、理解すれば唱えなくともよいとされた。この三者は全く異なるように、後世の徒は言うのである。信すれば良いとする親鸞上人の末徒も、感謝報恩の念仏をつづけるし、南無阿彌陀仏という中に、仏（阿彌陀仏）と衆生（南無）とが合して一体となっているから、念仏せずとも既に救われていると主張する証空上人や一遍上人の末徒も、それ故にこそ念仏をする。いづれも法然上人の「たゞ一向に念仏すべし」を実行しているのである。

最近、善導大師の御言葉について「念仏を念々に捨てない（止めない）のが、阿彌陀仏の救いに預る為めの念仏者の正しい行法である」と読み解釈して来たのを、それは誤りで、「念仏すれば、念々に仏は念仏者を捨てたまわれない。これが正しい念仏の仕方である」という意味に読むべきだとする説が唱えられた。前者と後者とが矛盾

するところであらうか。これは法然上人のように、經文を素直に拝読して、救いを求めて念仏するのと、唱えさせる經文の仏意を計って心の中に仏意を頂くのとの違いにすぎない。念仏せよとの仏の教えは、念仏で救う仏の意志であるから、仏力を信じ頂けばよいとする考えと、それ故にこそ念仏を持続せよとはげまされることは二者別のものではあるまい。読み方に異を立てる必要のないことである。念仏をすることと、念仏を与えられた仏の心と、仏への感謝と別なものではない。即ち親鸞上人の意味では法然上人に反するものではない。証空上人や一遍上人の考えは、言わば、外から考えた念仏の哲学で、南無（帰命）する衆生と南無される仏とは、すなわち願う者と願わせるものとの合致点が念仏であると意味づけることは、法然上人にも親鸞上人にも異議はない筈である。また、実際に念仏することは、親鸞上人も証空上人や一遍上人も法然上人を出づるものでない。念仏の信心を持つものにはいづれも背けるものである。両者共法然上人の念仏を仏の側から、念仏の成立の意味から、其事を意味づけ勧奨するものである。従って、私共からすれば念仏の元祖法然上人はすべての念仏宗に取つての元祖である。一向に念仏すれば、すべてを含んでいるとすべきである。



真宗よりみた

浄土宗開宗の意義

石田 充之

(竜谷大学教授・文庫)

(一)

浄土真宗では、その開祖とされる親鸞聖人がその主著である『教行信証』を元仁元年（一二二四）五十二歳の年に著わされたとして、今年、その生誕八百年記念法要と共に、立教開宗七百五十年の祝賀法要も併せて営むのであります。しかし、その主著である『教行信証』の後序には、承元の法難（一二〇七）によって、師である法然上人やその門下の人々と共に親鸞聖人自らも流罪になったことを、いざどおりの心をこめて書き、しかも、その後には、建仁元年（一二〇一）二十九歳の年に、法然

上人の本願念仏の教えにはいることができて、元久二年（一二〇五）三十三歳の年には、その主著である『選択集』を書写することを許され、その真影までいただいたことを述べ、この『選択本願念仏集』には、浄土真宗の簡要・念仏の奥義が明かされていて、それは「希有最勝の華文」であり、「無上甚深の宝典」であると、口をきわめて感激深く讃嘆されているのであります。

かような親鸞聖人の意向によりますと、浄土真宗の最も大事な念仏の奥義を明らかにするのは師の主著である『選択集』であって、その『選択集』の主張を、この『教行信証』は明らかにする以外の何物でもないという強い

意向がうかがわれるのであります。したがって、『教行信証』の著わされたことを祝して、浄土真宗の立教開宗七百五十年の記念法要を営むことは、師の法然上人が『選択集』を著わされて念仏の奥義を明らかにされたことを祝賀し、想いを新たにさしていただくことにもなるわけです。しかも、その法然上人の『選択集』によつての念仏の奥義の開顯は、承安五年（一一七五）その四十三歳の年に、善導大師の「一心専念弥陀名号」の指示によつて、専修念仏の実践に踏み切り、浄土の一宗を開宗されたことに出発するわけであります。

したがって、浄土真宗で、親鸞聖人が『教行信証』を著わされたことを記念して立教開宗七百五十を祝うことは、師、法然上人の『選択集』を製作されて専修念仏の奥義を明らかにされたことを祝することであり、そのことは、さらに、法然上人の四十三歳の年に念仏専修に出発され浄土宗を開かれたことを記念することに通ずるわけで、浄土宗開宗八百年を祝賀することになるわけにあります。かような意味で、浄土真宗の開宗七百五十の記念法要の意義は同時に浄土宗開宗八百年を祝賀し、その意義を深く考えざるをえないことになるわけです。浄土真宗の信徒一同が親鸞聖人の開宗を喜べば、師法然

上人の立教開宗を祝賀せざるを得ないのであります。

(二)

かように今日の浄土真宗のものが受けとめますほどに、親鸞上人は法然上人一辺倒の念仏の生涯に徹せられたのであります。したがって、親鸞聖人の弟子の唯円の編集したかといわれます『歎異鈔』にも、その第二章に「弥陀ノ本願マコトニオハシマサハ、釈尊ノ説教虚言ナルヘカラス。仏説マコトニオハシマサハ、善導ノ御釈虚言シタマフヘカラス。善導ノ御釈マコトナラハ、法然ノオホセ ソラコトナランヤ。法然ノオホセマコトナラハ、親鸞カ マフスムネ マタモテ ムナシカルヘカラス サフラウ歟。」と親鸞聖人のことばを伝えているのであります。しかも、このことばの前文には「念仏ハマコトニ浄土ニムマル タネニテヤハンヘラン マタ地獄ニオツヘキ業テヤ、ハンヘルラン。総シテモテ存知セサルナリ。タトヒ法然上人ニ スカサレ マヒラセテ、念仏シテ地獄ニオチタリトモ、サラニ後悔スヘカラス サフラウ。」と、如何に徹底した法然上人の専修念仏への一辺倒であったか、容易に想像されることでしよう。

かような意向は、親鸞聖人の内室であつた惠信尼公な

ども肝に銘じて印象づけられていたと思われまふ。親鸞聖人の入滅（一二六二）の直後、在京中の末娘の覚信尼公に越後より返信された手紙には、親鸞聖人の法然上人への入門の最初のことを、その思出として特に述べ、「後世の助からんずる縁にまいらせんと、たづねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又六角堂に百日籠らせ給て候けるやうに、又百か日、降るにも照るにも、如何なる大事にも、まいりてありしに、たゞ後世の事は、よき人にもあしきも、同じ様に、生死出づべき道をば、たゞ一筋に仰せられ候しを、うけ給はり定めて候しかば、上人のわたらせ給はん処には、人はいかにも申せ、たとひ惡道にわたらせ給べしと申とも、世々生々にも迷ひければこそありけめとまで、思まいらす身なればと、様々に人の申候し時も、仰せ候しなり。」と書かれてゐるほど、法然上人への熱烈な絶対帰依の態度であつたのであります。親鸞聖人の七十六歳ごろ作られた『高僧和讃』にも、「阿弥陀如来化してこそ、本師源空としめしけり。」等と、法然上人を阿弥陀如来の顯われられた本師であると讃歎し、さらに「曠劫多生のあひだにも、出離の強縁しらざりき、本師源空いまさずば、このたびむなくすぎなまし。」

と讀じて、私の永遠に限りなく深い迷いの人生を、ほんとうに悟へ向う人生へと切りかえさしてらもったのは、法然上人より選択本願念仏の救いの強い縁のあることを教えてもらったおかげだと、徹底した法然上人への帰依の態度をとらえていたのが親鸞聖人であります。

(三)

法然上人が、偏ら善導大師の教えによつて、選択本願念仏の教えを強く主張されてきたことは、特に浄土の一宗の独立を確立されたとみなされますほど、仏教二千五百年の歴史の流れの上よりみても、一大革新的な主張であると考えられます。菩提心を発し、戒律を厳守し、觀念を深めて、仏道修行に徹底して、この世で悟りを開き、現世を無我の浄土にすることが、インド・中国・日本を通しての仏教徒の念願でありました。かような念願は仏教徒のみでなく、すべての生あるものの理想的な念願だとも思います。したがって、釈尊の仏教は多くの人の共鳴をえて、多くの人々は真剣に仏道修行にはげんだのであります。それは人生にとり、特に今日のような社会にとって大変尊いことであります。しかし、仏道修行に熱心であればあるほど、自らが現世で無我の人生を

実現してゆくことが如何に困難であるか、それは聖者の道であっても、凡夫悪人には、とても実現不可能であることに徹底的に深く気づかされての一大宗教的実践の転換が、法然上人の山を降りられて、善導一師により本願念仏の実践へと踏み切られた歩みであったと考えられます。それは、「聖道門ノ修行ハ智慧ヲキワメテ生死ヲハナレ、淨土門ノ修行ハ愚痴ニ還リテ極楽ニ生ル。」（和語灯・西方指南鈔）と明快に示される愚痴無智者としての仏道実践への踏み切りであったと思われます。愚痴の法然房、十惡の法然房の救われる道が、法然上人に許された唯一の仏道実践の道だったわけであります。それは、悟りそれ自体の動きである阿彌陀仏の本願力他力に生かされて悟りに至ることに徹底しようとする念仏専修の道であり、淨土一宗の実践であります。自力道より他力道への転換、聖道門の実践より淨土門の実践への一大転回、それは、仏教二千五百年の歩みの中に、たえず準備されてきたのでありますが、それが結集されて、大きく転回され明確に踏み切られたのは法然上人の決断によって具体的に実現されてきたわけであります。

それは仏道二千五百年の歴史にとっては、確かに一大革新であります。したがって、笠置の貞慶上人を代表者

とする『興福寺奏状』の起草反論が展開され、その入滅直後には、当代の真面目な仏教者の第一人者ともいえる母尾の明恵上人の『摧邪論』などの、法然の主張は仏教ならざる外道であることまでの反対を受けたわけでありました。しかも、その生前中は勿論、死後に至るまで、その門下信徒と共に、流罪・死刑・遺体の発ぐつといった迫害が相つづいたわけでありました。それほど、法然上人の仏道実践の態度は熱烈であり、その主張は革新的であったことを想わされます。したがって、亦法然上人への親鸞聖人の帰依も徹底したものであったことを考えさせられます。『教行信証』の後序に、流罪や『選択集』の書写などのことを述べられる中で、「特に然るに愚禿積の鸞、建仁辛酉の曆、雜行を棄てて本願に帰す。」と、最初の入門のことを自ら記述される意義も、法然上人の教えにより始めて、自分の救われ、悟る道のみつけられたことが如何に印象深かったか想像させられます。したがって、そのことは、上にも述べましたように、内室の恵信尼公にも弟子の唯円にも明瞭に伝えられていったわけでしょう。それほど革新的な法然上人の教えは、本願念仏の教えであり、凡夫が凡夫のまま悟りをうることが可能な大衆仏教であったわけですから。愚者悪人の救われる教えであ

り、男女をえらばない易行の俗人仏教であつたわけであります。釈尊如来の仏教二千年の歩みは、どちらかといえば、聖者の道であり、出家者の道であつたことが考えられますが、法然上人は、自らは戒律厳守の清僧でありつつ、その自己を愚痴十惡人、俗惡人と変らぬものと見出して、本願念仏の專修により淨土門・凡夫道こそ、真に救われ悟りに至る道であり、それこそ仏道の真実の実踐道であるときと立張されるに至つたと考えられます。それは、自力道より他力道へ、自証教より救済教への一大転換であり、仏教がいわゆる宗教として確立された明確な第一歩ともいえると思います。

したがって、法然上人の『大經釈』などによれば、如何に、阿彌陀仏の本願他力救済を力説され、仏道修行に無縁とまでもみなされた女性などの救いを強調されているか、注目させられるところです。かような法然上人の主張は、親鸞聖人の全面的な帰依となり、又非僧非俗を自認しての結婚生活への踏み切りとなつたことが考えられます。それは、全く在家仏教の実現ともいえましよう。誰でも、普通の生活のままで、真実に救われ、真実に生きることできる仏教徒たりうるといふ仏教の発見は、仏教二千五百年の歴史を考え、無我をとき縁起をとき、

真如をとく仏教であればあるほど、その意義の重大さを思わされざるを得ません。それは、正しく現代を救う仏教の発見ともいえるとおもいます。かような、いわゆる新仏教、徹底した意味での、すべての人々への真実の仏教の発見の第一歩が、法然上人によつて見出され、その意義が親鸞聖人によつて徹底化され実現された意味で、親鸞聖人の念仏の道に生かされる真宗者は、こぞつて、法然上人の淨土宗開宗八百年を記念し、祝賀の意を表せざるをえないのであります。惡人正機の教えの具体的な第一歩は親鸞聖人の師法然上人にこそ見出されねばならぬことを深く考える次第です。

親鸞聖人が、法然上人の多数の法語集である『西方指南鈔』を、その八十四歳になつてまで写し、さらに、その八十八歳の文応元年十一月の乗信房宛の消息に「故法然上人は淨土宗の人は愚者になりて往生すと候しことをたしかにうけたまはり候しうへにもものおほえぬあさましきひと／＼のまいりたるを御覽しては往生必定すへしとてえませたまひしをみまいらせさふらひき。」等と、法然上人門下時代のことを、その最後晩年まで思い起される親鸞聖人の法然上人への傾倒を、深く偲びたいと思います。(一九七三、一、廿五、記)

われ浄土宗をたつる心は、凡夫報土にうまゐることを示さんがためなり。もし天台によれば、凡夫浄土に生ることをゆるすに似たれども、浄土を判ずること浅し。もし法相によれば、浄土を判ずることふかしといえども、凡夫の往生をゆるさず。諸宗の所談ことなりといえども、すべて凡夫報土に生ることをゆるさざるが故に、善導の釈義によりて浄土宗をたつるとき、すなわち凡夫報土に生るることあらわるるなり。

法然上人のご法語のなかで、浄土宗を開かれた心もちを、もつともよく表わされたお言葉としてあげられるものが、以上の文である。

当時の仏教は、比叡山、高野山、南都に分けてみることができが、ここでは、比叡山の天台宗と、南都の代表として唯識宗の主張をとりあげて、浄土宗の立場を明しているのである。天台宗のおしえでは、阿弥陀仏の浄土は必ずしも勝れ

立 教 開 宗



ているところとはみず、むしろ劣っている浄土であるとして、凡夫が往生するのであるという。また、唯識では、凡夫は阿弥陀仏の浄土に生れることはできないとしている。

しかし、わたくしたちは、救われていく世界が不完全なところであつては納得できるものではない。法然上人は、阿弥陀

仏の浄土は、本願によつてできた世界であるとして、本願に示されたお念仏を實踐し、南無阿弥陀仏と唱えるものは、本願の支持力によつて完全に救われるとおしえられているのである。

おもえば、九歳のときに出家されてから、三十有四年間の血みどろな求道生活のすえ、法然上人によつて完全に万人が救われる道が開かれたのは、上人自身のよろこびではなく、人類すべての永遠のよろこびであり光明であるといえよう。人類の永遠の平和と救いの道を開かれてから八百年、法然上人を讃仰し、今再びその意義を味いたいたいと思う。



参議院議員

山下春江

対談



作家

寺内大吉

—人生と信仰を語る—

私は内閣生字引の娘です

寺内 現代は宗教不毛といわれる反面、新興宗教に見られるような動向もあり、若い人々の間では仏書が盛んに読まれたりしており、宗教再確認の様相を呈しております。こうした折、私たちの浄土宗では、明年開宗八百年を迎えようとしております。本日は永年政界で活躍されております山下さんに、その経験から、また昔をふりかえって、いろいろお聞きしたいと思っております。お聞きするところによると、目黒の祐天寺のお檀家ということですが。

山下 目黒で酒屋を営んでおりました私の母の里が、代々祐天寺様にお世話になっておりましたので。しかし事業に失敗したために、当時内閣に勤めておりました父が、この代りとして祐天寺様の総代となりました。その後山下家で経営していた工場を福島へ移転することになり、戦時中でもありましたので、仲々上京の機会もないと思い、代々お預りしておりましたものを祐天寺様にお返しし、私たちは福島へ移りましたが、先祖がねわっておりますのは祐天寺様ですから、ご年忌の度ごとに東京へ出てまいりました。しかし、遠方のこと故、だんだん疎遠になったことも事実です。

寺内 そういたしますと祐天寺様とは、仲々ご縁が深い訳で

すね。お父様は永く内閣にお勤めしていらしたということですが。

山下 父方の家は代々尾張の徳川家指南番であったのですが、父が十三歳の時、廃藩置県がありましたので上京し、十六歳の時に内閣に勤め、七十五歳で亡くなるまで勤続しておりました。大学出の官僚制度の中で、藩校しか出ていない父は、高等官一等でしか昇進できず、その地位に二十三年間いた訳ですが、歴代の首相につかえ、内閣の生字引といわれ、生涯を終え、今祐天寺様にねむっております。

必勝の力は岩上観世音

寺内 縁起ということばは、本来仏教から出たことばですが、選挙をたたかいぬくため、また日頃の生活の中で、縁起をかついだりすることはありませんか。

山下 私の心の師としておりました福井県永平寺の管長熊沢太禅師様に、選挙の前に「必勝」の文字を書いていただきました。当時九十歳であられた禅師様は、『私は来年死ぬから九十一歳と書いておきましょう。年が明けたら一切筆を持ちませんから、これが絶筆となりましょう』と、私の無信心から来るあつかましさに快く引受けてくれました。そし

て『あなたは銭がないから、こまった時にはこれを売りなさい、絶筆だから高く売れるでしょう』ともいってくれました。その額が今でも私の部屋に掲げてあります。

寺内 さすが禅宗の大家といえますか、山下さんの心のうちを読みとったお言葉ですね。

山下 その後、お盆のお参りに永平寺にまいりました折、丁度寺内のお坊さま方が盆中ということで不在でありまして、禅師様自ら招き入れてくれ、お茶を頂戴したのですが、その時に岩の上に坐っていられる観音さまの絵をくださいまして、『この岩上観世音は、あなたのたのみごとをなんでもかなえてくれるから、しっかり信仰しなさい』といわれました。そこで帰京後、早速同郷の福島から出て、日本橋で経師屋をされていた奥村という方に表装していただき、所用で永平寺東京別院に來られた禅師様にお見せしたところ、『大変立派になりましたね、お霊入れしてあげましょう』と、よろこんで下さいました。その後間もなくお亡くなりになりました。

寺内 やはり九十一歳でしたか。

山下 はい、翌年九十一歳で亡くなりました。

寺内 数年前亡くなられた、やはり禅宗の山本玄峯師も、年もおしつまった時点で、医者からも見はなされたのですが、今私が死ぬと、正月早々葬式をするようになり、寺に大変迷

惑をかけるからと、酒を用意させ、それを飲みほすと、元氣をとりもどされ、なんと翌年の六月亡くなられるまで元氣であつたということで、その時も酒を用意させ、さすがに起きあがることはできなかったそうですが、一気に飲みほすと、三分後に大往生とげられたということです。何か共通するようなところがありますね。

山下 あの時、禪師様から頂戴したお茶の味が、今までに舌に残っているような気がし、忘れることができません。そして、その岩上観音像も部屋に掲げてありますが、朝その像を見るたびに、『禪師様お早ようございます』と、今だに心のささえとしております。

寺内 永平寺は曹洞禪宗で、私たちの浄土宗とは、自力と他力で相対立する立場にあります。これは教理上のことで、実際には大変交流が深いのです。たとえば永平寺をお開きになられた道元禪師のもとに、時の將軍北条時頼公が、一度禪師の説法を聞きたいと、幾度となく永平寺へ使者を使わすのですが、快い返事をもらえないのです。そこで將軍は鎌倉におりました浄土宗第三祖の光明寺の記主禪師に相談したところ、それでは私が道元禪師にたのみましょうということになり、使いを出したところ、道元禪師は二つ返事で鎌倉にまゐり、記主禪師に禪の数々をお説きになったのです。將軍時

頼公らは次の間で間接的にその説法を聞いたということになっております。これは法然上人の弟子九品寺長西が、道元禪師の弟子にもなっているところからと思われますが、浄土宗側の史料ではこの点に触れておりませんが、曹洞宗側の史料にはあるということです。

山下 味の素の社長も、本来は浄土宗なのですが、戦時中ご子息を疎開させた折、禪師様到大変お世話になりましたので、そのため知れませんが永平寺のことばかりいわれますので、私も多分に感化されたのかも知れません。

寺内 いずれにいたしましても、法然上人も道元禪師もあの鎌倉期に、日本人による日本の新しい仏教の担い手としてそれまでの呪術的な思想から、民衆に密着した、自力にしろ他力にしろ、その入る道は別にしても本当に人間的な思想を作り出された訳ですね。

山下 確かにそうです。私も太禪禪師様の人間性に心うたれ、頂戴した岩上観音と禪師様が二重写しになっているように錯覚し、今日なお、この岩上観音を心の縁よすがといたしております。

寺内 そうした自然に、何の抵抗もない心持ち、それが宗教心の芽生えであり、信仰に入るとなると思います。

山下 ただ今だに、何故観音様の絵をくださったのか分らな

いままに、今日まで来てしまったのです。

寺内 観音信仰は慈悲の教ですから、女性である山下さんに、常に慈悲・愛の心を持ち続けなさいという意図でくださったのではないでしょう。

山下 今にして思えば、そういうことだったのでしょね。

南無阿弥……は心のふる里

寺内 浄土宗関係のもので、そうしたものはありません。

山下 そうですね。戦争が急をつけた頃、福島へ疎開する折、お仏壇にまつてありました、法然上人の座像と祐天上人のご名号を、そうした忽々の折でもありましたので、祐天寺様にお返しし、そのままになっております。中でもそのご名号はお線香の煙のため南無阿弥までしか読みとれないものですが、今だに心に残るものです。

寺内 それは大変由緒あるご名号ですね。多分祐天寺様でも大切に保管してあると思います。

山下 それと共に気になりますのは、疎開の直前に、ただそこに父がねむる印にと、小さな墓石を建てたのですが、お墓はあまりいじるものではないといわれておりますので、気になりつつも今日まで来てしまったのですが、どういふもので

しょうか。

寺内 そのようなことはありません。贅をつくす必要はありませんが、先祖のねむるところですから、きれいにすることは当然でしょうね。

山下 ご先祖の立派なお墓の前でおがむということは、大変気持のよいことでしょからね。

寺内 これは一例ですが、あのマルキストの河上肇さんでも、京都の法然院に生前から墓地を求め、今はそこにねむっていられますが、これは誰しもが求めるものではからね。

大豆から代議士へ

寺内 山下さんも政界にはかなりの年数になり、勲一等瑞宝章の叙勲の榮に浴された訳ですが、そもその動機はどういうことだったのですか。

山下 女というのは政治家にむかないといわれますが、逆に女性でなければ気のつかない点もあると思ったのです。そして、初めて出ました昭和二十一年の選挙の折、当時農林省から出ていた大豆の統計が一反歩当り二俵半であったのを、油断大敵とはこのことであると、私は選挙演説としてではなく聞いて下さいと、一反歩五俵作の方法を教えますというの

が、第一声でありました。

寺内 さすがに女性らしいアイデアですね。

山下 ところがこの五俵のうち、四俵を人間に、一俵を肥料にという私の持論が、GHQの逆鱗にふれ、今の日本は食料不足であるからと、その意見を取り下げざるを得ない破目になりました。そこで戦前から民法で人格が認められていないのは女性と狂人でありましたので、女性の人格の尊重という点を前面に押し出し、この点を強調し、当選することができました。

寺内 その選挙公約は実行にうつせましたか。

山下 当時は現行の議事運営とは異なっておりまして、まず必要と思われる法案を提案委員が本会議で趣旨説明をし、採択されると、それを専門委員会にかけ、法律が成立する運びとなる、今と全く逆の手順をふまなければなりませんでした。私は選挙民に公約した以上、なんとかしなければと、本会議で趣旨説明をしようと思ったのですが、時の司法大臣木村篤太郎氏が、これは後日談ですが、女性の分際で大臣の答弁を求めるとはけしからん、という訳で、木村大臣は本会議に出席されないので、その下に働いていました司法参与官ならば、答弁に立つというのですが、私が受けつけないというので、当時では異例の本会議が三十分程停滞したほどだ

ったのです。

寺内 当時としては、これは仲々勇気のいることだったでしょうね。まして女性ということですから。

山下 そうです。私も引くに引けませんのでがんばりました。木村さんもしぶしぶ本会議に出席し、『山下議員の趣旨もつとも故、委員会を設け善処いたします』ということになりました。これが「家庭裁判所法」の成立であったのです。

神仏に守られた捕虜開放

寺内 その外、いろいろあったと思いますが、特に印象に残ることはありませんか。

山下 今なお脳裏に残っていることですが、シベリヤに抑留されていた百万人の将兵開放のため、日本代表として、国連捕虜特別委員会に出席したことです。その時、当時のハマーショルド事務総長が、演説の前日、ソ連も充分反省しているから、あまり刺激するような発言はさしひかえた方がよろしいですよと、発言内容の提出を求められました。しかし、当日の演説の五分前に事務総長にお会いし、私は日本の母、妻の代弁者としてここへまいったのですから、もし婦りの途上、悔いの残ることがあっては申し訳けないので、前

日の約束は反故にしたいといっているうちに時間となったのです。そしてこの演説中、自分でも思いもつかない言葉、意見がすらすら出、多くの感銘を与え、成功を収めました。私はこの時ほど、神仏のご加護とはこのことだと、思ったことはありませんでした。そして前例をみない三ヶ国の賛成演説をいただき、本来ならば本会議に上程し採択するところ、議長長の裁断でその場で議決され、早速国連の名のもと、戦後十年間捕虜を酷使し、国の復興を図ったソ連の行為は、国際人道に違反行為であるから、直ちに開放せよ、との電報が打たれたのです。

寺内 その時の感激は一入であつたでしょうね。

山下 私はこれに意を強くし、当時の米国のダレス國務長官にお会いし、果鴨ブリズムに拘置されている九八六名のB級戦犯の釈放をたのみ込みました。これもうまくいきました。命がけの行為というのは初めてのことでしたが、神仏のご加護や、ご英霊がうしろについていてくれたということ、で気持ちの上に、ある種の安心感があつたことも事実です。

寺内 女性のそうした行為はあまり例のないことですから、アビール効果万点ともなったのでしょうか、ことに日本女性という点からすれば特筆ものといえましょう。アメリカでは戦前より陪審員を採用する時、ドイツ系と日系人は採用しな

いことになっています。これは両国人とも官吏に弱いということから、冷静さを欠き、権力側につくといふのですね。

山下 確かにいわれる通りです。こうした官僚至上主義は、日本人の欠点であり、損ともなると思っています。

寺内 東欧の先進国ソ連では、今日のような平和な時代に、民衆を指導するバックボーンを見失ない、悩んでいることから、出てまいりましたのが、徳川三百年の政治体制ということ、です。あの鎖国の状態で民衆を指導した政治をと、エネルギッシュにその資料を集めているということ、です。

山下 そういう生活の端々まで指導する官僚制度にも利点がありましようが、日本では昔より、その相対として民衆を指導する一方の宗教面が微弱のような気がいたします。本当に民衆のための、筋の通った宗教の出現を望みたいと思ひます。いよいよ明年は浄土宗開宗八百年ということだそうですが、そうした点も踏まえ、所謂官僚国民ともいえる民衆を指導していただきたいと思ひます。

寺内 いろいろ貴重なお話をいただきありがとうございます。私たち浄土宗侶も、明年にせまった開宗八百年を目指し、あの開宗時点の祖始法然上人の心持ちに帰り、更により良き社会建設のため進みたいと思ひます。

「法爾の道理といふ事あり」

後藤真雄

(浄土宗布教師会
関東支部長)

法然上人の御法語に

「法爾の道理といふ事あり。ほのをはそらにのぼり、水はくだりさまになる。菓子の中に、すぎ物ありあまき物あり。これらはみな法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかい給ひたれば、ただ一向に念仏だに申せば、仏の来迎は法爾の道理にてうたがひなし。」と、

解深密經に四種の道理と云うのがあって、その第一を觀待の道理といいます。よく見、くらべて見る事によって、成程な、とうなづける道理を発見出来ると云うのです。觀といふのは、見て見るという事で、眼で見、耳で

聞いて見る。鼻でかいで見る。舌で味って見、鼻でふれて見る。心で考えて見る。即ち六根で見る事を觀の目等といって、觀の目で見ると大体の道理はわかるものです。それでもわからぬ時はくらべて見る事です。お恥しい事です、家の孫共にみかんを出しますと、我先きにと、少しでも大きそうなのを争って取り合い、「僕の少し小さいヤ……」等と云っております。一つづつ別だったら大きいも小さいもわからないのですが、くらべる事によって大小、優劣がわかります。自分の家と隣の家、自分の仕事とひとの仕事、比較し、並べて見ると、今まで気のつかなかった事に気がつきます。これを待と云います。待籍の



義といわれています。然しその場合兎もすると、ひとの良い所ばかりに気がつき、優れた所ばかりがうらやましく、そねみ、ねたみの気持ばかりおこって参ります。それは観が足りないのです。本当に見て見ると自分の良さ、自分の仕事の優れた値うちがわかって参ります。これが観待の道理です。

次が作用の道理です。これは因果の道理とも云って、今悪いからといっていつまでも悪いわけではありません。善いからといって、それがいつまでも続くものでもありません。熱湯に水をそそげばぬるくなり、ぬるかったら火にかければ熱くなる。何か他から力を加えたり、とったりする事によって変化する道理、因果応報の道理である。

第三番目は証成の道理といって、成就の道理ともいい、分析してみたり、比較して見たり、先哲や、先輩のいわれた事や、した事をしらべたり、考えて見ると、どうしてこうなったかという事がわかり、道理でと納得する事が出来る。

以上の三つの道理は科学の世界での方法論であり、実験、観察分析等によってその道理を探究する方法であり、これらは可知の道理である。

最後の第四番目を法爾の道理又は法然の道理というのである。

法然上人は、ほのおが空にのぼったり、水が下の方に流れたりするのも、果物の中に甘いのが、すっぱいのがあったりするが、それは皆自然法爾の道理だというのである。ほのおが上にあがるのは熱と気圧、比重の関係であり、水が下に流れるのは地球の引力のためであり、何の不思議もない様に思えるが、どうして熱を加えると気圧や比重が変わったり、何故引力があるのか、わかった様な顔をしていても、実際はわからない事だらけです。然し昔から水は下へ下へと流れています。誰も不思議とも何とも思いません。あたりまえの事なのです。然しこのあたりまえの事程不可思議なものはありません。

数字でいうと一と云う数字です。二に三を



加えれば五になる事は小学校の一年生で知っています。然し一と云うのは何かと云われますと本当に困ります。一本、一寸、一人、一円皆基本の単位ですが、人間一人といった所で大中小、強弱、長短、皆異なっています、皆一人には違いありません。

「今日は何人集った」等と平気で云っています。男女の別もあり、老幼の差があり、たとえ不具者であってもそれは一人です。「頭かず」というから頭さえあれば一人なのだ、という人がありますが、一寸無理だと思えます。

こんな難しい一も、何の不思議もなく、少しの疑いもなく、誰れでも承知しているのです。この誰でも疑いなく、いつでも不思議とは感じない道理を法爾の道理というのです。

法然上人の時代にはまだ一般に砂糖はなかった様ですから、御法語の中の菓子とは果物の事です。リンゴ一つにしても、赤いのや、黄色のや、かたいのや、やわらかいのや、色々あります。同じ様な木であり、同じ様な葉

であっても出来る果実は千体万様です。

花が咲けば千紫万紅、色とりどりです。その一つ一つ皆決して同じものでありません。悉くが皆夫々に異なっているのが法爾の道理なのです。人間一人一人も同じ様に、趣味、教養、能力、知恵、体質、技能、同じ家庭で同じ様に育った双子でも違いはあります。同じ人間といっても必ず違っているのが法爾の道理です。その異なった人々の間に共同の生活、平和な社会を作りあげて行くのが民主主義だと思えます。いわば差別を認め乍ら、その中に平等の法則を見出す。個々を尊重しながら全体をつくり出す。法然上人の御法語は今日の民主主義の根本理念を八百年も前から示されたものとも云えましょう。

阿弥陀如来の御本願は、罪深い多くの人々を誰彼の差別なく、念仏を称える事に依って必らず救わずにはおかぬとお誓いになっておられる以上唯一向に念仏を称える事に依って、阿弥陀仏の御光の中に救われる事は、法爾の道理で何の疑いはない、と御法語の最後

は結んでおられます。

水の下に流れ、火の上にのぼるのを見て、何の不思議とも思わず、あたりまえの事と感じる様に、そこには何の不安もなく、少しの疑いももつ必要もなく、水の低きに流れる様に、念仏することによって、救いの道へと自然に導かれて行くのです。あの人は頭が良いから、あの人はお金持ちだから、あの人は力があるから、いえは皆異なっている一人一人である事は、菓子の中にすきものあり、甘きものありと云われた御言葉の通り、これも法爾の道理として少しも心配する必要はないのです。罪惡の衆生をみちびかれる阿弥陀如来の本願は私の様なものでも念仏することによってお救いを頂けると信ずる、いや信ずるとか信じないとか云う余地すらない、法爾の道理とうけとて参ります事を深心とも申します。

私共毎日テレビを見ております。ニュースによって世界中の事が瞬時にして知る事が出来、娯楽番組はいろいろと楽しませてくれます。私共はテレビの機械の中の組立て、配線

等の事については全く無知です。いわんや発信電波の事などは全々わかりません。知っているのはチャンネルを合せる事、スイッチを入れる事だけです。然も何の不安も疑いもなく、毎日スイッチを入れるだけです。

その理論、技術も研究し、發明された科学者には本当に敬意と感謝をおしませせん。

法然上人は八百年も前に、誰れでも、どこでも、只念仏を口に唱えるだけで、阿弥陀様にお救い頂ける法を見出して下さったのです。何の不安もなく、何の疑いもなく、お念仏のスイッチを入れるだけで、阿弥陀様の御光りの中に、明るく、正しく、楽しく生きぬく事が出来るのです。然も八百年もの間、何の不都合も起ってはおりません。私共浄土宗開宗八百年を迎えるに当って、今更の様にその歴史の重さを感じると共に、法然上人がその御法語の一つの中にさえ、今日の私共に新しい力を与えて頂ける事を泌々と感じますと共に、念仏生活の尊さを有難くうけ取らせて頂いています。



ハワイの浄土宗

浄土宗ハワイ開教区総長

藤花 教道

近年、西から東から、ハワイに押し寄せる観光客の多いこと驚くばかり。わけても、いちじにドツと日本から訪れる団体組の颯爽たる姿は、勇ましくもあり微笑ましくもある。長いあいだ「此処だけは自然の美を残しておかねば」と力こめられて来たワイキキ海岸の寂けさも、今は騒音烈しく而も

コンクリート・ジャングルと変っている。ハワイの島々、どこもかしこも急激な変化の目立たぬところが無い。然るに、何処に魅力をおぼえるのか異口同音に「ハワイは素晴らしい」と観光客たちは言う。空が澄んでいて美しい、吸う空気が美味しい、水がうまい、色とりどりの花が、一面の緑が、まったく綺麗だ、などと褒め言葉を惜し気なく連発する。四十二年間も住みついて来た私など「そうかなア」と思うこと屢々である。

個人で来る人、団体で来る人、その中には必ずと言っていい

いほど、浄土宗関係の幾人かがいる。「折角ハワイに来たのだから」と別院を訪ねる人が、少なくとも月に二、三十名はいる。多い時には日に十五、六名も。おかげで、生々しい日本のニュースが次々と入って来る、有難いことと思う。

来る人みな一様に「外国に来てこんな立派な仏教寺院が見れることは想像もしなかった」と言う。駐在の若い先生（開教使諸師）達が日英両語で、明るく朗らかにキビキビと動いている現実の姿に見とれて「日本のお寺とはマルキリ違うなア」と感心し、集い来る人達の多くが青少年達である事に感心し、仏前で結婚式を挙げ、子供の初詣りもお寺へ、という実状を知って亦々感心してゆく。お世辞や表情だけではなさそう。

浄土宗・西本願寺・東本願寺・曹洞宗・真言宗・日蓮宗と六つの別院がホノルルに在るが、浄土宗は明治二十七年の開



宗で最も古い歴史を誇り、開教八十年をいま迎えている。

ローマは一朝にして成らず、始めから今日の大教団が湧いて出たのではない。開教当初の開教使諸師が、極端な交通不便と闘いつつ布教伝道に努め、殊に、三度の食事すら不如意の日が続くこと決して珍らしくなかった、というのが事実で、雨来、血みどろの奮闘

を続けて来た先輩開教使諸師の形容しがたい努力。それを受け継いで、教線を拡張し、基礎を強固にすべく、身も魂も伝道に捧げて来た開教使諸師の涙ぐましい精進、それに協力を惜しまなかった。と云うよりも、むしろ悦んで正法護持と社法の為に奉仕された在留同胞の物心両面にわたる尊い援助、これら一丸となって今日の相を築き上げて来た、というのがハワイ浄土宗教団の歴史なのである。

日本煎茶道の披露がいまハワイ大学・東西文化センターで

開かれている。その顧問として一行八十名を先導された大正大学教授・安居香山師が「総長、ぜひ何か雑誌浄土に書いて貰わんけりゃいかん、写真を添えて」という命令。初めてハワイにみえたお客様に『私は直ぐ他島に出張しなきゃならん、時間が無い』と素気無くお断りすることも出来ず、一気にペンを走らせて来た訳だが、ふと、昔はじめてハワイの土を踏んだ頃の『ハワイの実状』が思い浮び、私自身、今昔の感に堪えない。

いまハワイの浄土宗は、新進気鋭の開教使を求めている。時勢が移り変って、英語が必要であることは言うまでもない。だが、依然として日本語が盛んに使われ、日本語による布教伝道も欠くことが出来ない。私など、お粗末な英語を使うよりも、生涯、日本語で通そうと妙な頑張りを続けている。

昔と違って、贅沢こそ出来なくても、開教使の衣食住は保証されている。勿論、その家族も。宗教家も人間、欲はある。だがその欲のとりになったら宗教家の価値が無い。俺もいっちゃおう、海外で活動してみたい!! という気鋭の人物なら、何名でも歓迎する用意が出来ている。いま、ハワイの青壮開教使は、何れもビチビチと活動を展開し、そこに明るい生き甲斐を見いだしている。(一九七三・二・一二)



法を求めて

—開宗への歩み—

大橋 俊雄

(時宗研究所研究員)

門を叩き教えを請うたのは、この年(保元元年一一五六)のこと。その三年後平治の乱がおこり、治承四(一一八〇)年には源頼朝が伊豆に兵を挙げ、源平が相い争うことになった。

貴族から武士の手に政権が移ったのは、平氏が壇の浦で滅んだ寿永四(一一八五)年のことであり、源頼朝は翌文治二年三月総追捕使に任命され、建久三(一一九二)年征夷大將軍となって鎌倉に幕府を開いた。しかし、武士が政治の分野で発言するようになったのは保元の乱以来のことで、この乱をさかいに武士は次第に政治に口だしするようになった。法然上人が嵯峨の釈迦堂に参籠し、のち奈良に赴き学匠たちの

その翌々年の寿永二年には旱魃があった。一滴の雨も降らない。稲田は干しあがり、稲は枯死寸前で、米の収穫おぼつかなしというときに、拍車をかけるようにおそってきたのが、秋に入ってからの大風雨であった。せっかく稔った稲も倒れて収穫がない。飢饉は翌くる年までつづいた。口にする食料に事欠けば、栄養もとれない。そこに疫病がはやれば、

ひとたまりもなく感染し、それは死においやる。荘園体制が不十分で、しかも交通のとのわなない当時としては、食料がないといつて他の國に助けを求めることもできない。人はあれよあれよと、おそれおののくばかりで手のほどこしようもない。自分一人が生きていくのがようやく、生きるためには手段をえらばず、人間が人間を食べたこともあれば、嬰兒を捨てる人もあった。飢饉は人の心を鬼と化していく。京都五條の橋の下では、飢にたえかね捨てられた子供を食べている人もいれば、死んだ母親の乳房にすがり血をすっていた幼児もいたという。修羅の世が、實在したといえようか。

天災による悲劇は、この年ばかりではなかった。程度の差こそあれ、ひとたび天災がおれば、こうした状態になる。当然だといつて手をこまねいて見ているわけにはいかない。誰かに救ってもらいたい。この世を救ってくれる人は誰かといえ、救わなければならぬ立場にある人は為政者か、さもなければ僧侶である。だが、彼らは自己の権力をうちたてるために汲々として、他人どころではない。為政者か、さもなければ僧侶が救ってくれなければ誰一人として頼れる人はいない。人びとは不安な目をすごしていた。「誰か救ってくれ人はいないものか」「救世主出でよ」の声は、どこからともなくわきあがってきた。しかし、誰一人として手をかす人

はいない。神仏にさまざまなお祈りをしたところで、何の驗もなければ、何ら期待さるべきさざしもあらわれない。生きる望みを失ない、悲惨のどん底にあがきおののいている人たちの心情は、如何ばかりであつたろうか。

この世で業縁につながれ、どうすることもできなければ、現世における幸福の追求をあきらめ、来世を待つほかない。だが来世、すなわち極楽浄土への往生は特権階級にのみ許され、一般民衆には許されていない。民衆は現世でも来世でも救われない、というのが当時の社会の約束であり、宗教のすがたであつた。もし、そうした立場に自分がいたとしたら……。法然上人はこのさまを見て苦悩した。すべての人の救われる道はないものか、一般民衆の声を聞いて上人は居ても立ってもいられないほどの、いらだたしさを覚えた。貴賤男女、生きとし生きるすべての人がわけへだてすることなく、救われる道を求めるための遍歴が、こうしてなされることになった。

二二

法然上人が故郷美作国をあとに比叡山に登り延暦寺を訪ずれたのは、天養二(一一四五)年十三歳の時のことであつた。

登山して初めて師事したのは、北谷持法房源光であり、その二年後源光のすすめで東塔西谷の功德院皇円の室に移り、戒壇院で円頓戒を受けた。円頓戒は僧侶としての行為を規定したもので、正しい道を歩むのにはどうすべきかという指針を示したものである。比叡山には籠山ろうざんといって、十二年間山を下ってはないという、きびしい制度があった。日夜仏と対坐して思索を練り、書物をおして仏教の真意を学ぶのが僧侶としての使命であり、理論と実践の両面から仏教を学びとり、多くの人々を救う道を求めたい、これが法然上人の求める道であった。

救うとはどういうことかといえば、極楽浄土に生れることができるようにさせてやることだ。民衆に解放する教えがあるとすれば、これしかない。極楽浄土は修行して仏になれる人のために、阿彌陀仏が用意しておいた教えであり、阿彌陀仏の力によって仏とともに暮らすことのできる国である。平安時代の貴族たちは、その浄土にあこがれて念仏した。だが民衆に果して解放することが許されるであろうか。僧一人、修行をつみかさねることによって往生することはできても、一般民衆が対象となっていなければ、高嶺たかねの花でしかない。

比叡山では源光や皇円のもとで、さまざまの修行をした。

比叡山は天台宗の総本山。天台宗では諸法実相の「理」に徹し、それを体得することによって仏になることができると説いている。では、その理を体得するにはどうしたらよいか、体得する方法を止観しかんといっている。心をしずめ物を正しく見ることによって、それを得ることができるという。人の心は常にそわそわしておちつかない。だから物を見るのに、欲目で見たり、憎しみをもって見たり、私心をもって見たりするのだ。よこしまな心で見ると、正しく見ることはできない。そこに迷いがあるのだ。心をしずめて正しく見るのが肝要である。それには修練が必要である。修練の具体的方法として天台宗では常坐三昧・常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧の四種三昧をあげている。九十日をかぎり一堂にこもり、文殊菩薩を本尊として飲食用便のほかは立つことなく、坐りとおして修行するのが常坐三昧、常行堂で阿彌陀仏のまわりを念仏しながら行道するのが常行三昧。このほか大日如来の前に坐り、身に印契を結び、口に真言をとえ、仏のすがたを思いうかべる遮那業しやなごうと、山野を跋涉し自然と合一しようとする廻峯行かいほうぎょうとがあった。こうしたもろもろの修練を重ねた上で、遂に一つに徹したとき仏になることができる。修練は教養課程とでもいべきもので、それが深ければ深いほど円満な仏格になれるという。従って、人によっては茫漠と

して、天台の教えはつかみどころがないというかも知れないが、それは一面教養課程の広さを示すものであるといえよう。

三

こうした修練を、法然上人はいとわず比叡山で修めた。だが、それとて僧一人の修練、修行者は仏になることはできても、すべての人は仏になることはできない。いわば万人共通の救いの道とはいえない。すべての人が救いの対象となる救えはないものかと思ひあぐんだ末、西塔黒谷別所にいた黒谷聖人叡空をたずねて師事することにした。暴力が横行し、武器を手にした僧兵たちが幅をきかせていた比叡山の中で、もっとも静かな所が黒谷であったからである。ここでは二十五三昧が修されていた。二十五三昧は毎月十五日、同行たちが集まり、極楽浄土に往生できるようにと、『法華経』を読んだり、仏教の話を聞いたり、念仏したりする会合で、その会の思想的バックボーンとなっていたのが、源信の『往生要集』であった。

法然上人がはじめ『往生要集』に接したのは黒谷であり、師の叡空から講義を受けたが、この時の逸話が『拾遺古徳伝』という法然上人の伝記にのこされている。

四

叡空は講義したとき、「念仏のみ姿を觀する法（觀仏）と、仏のみ名をとる法（稱名）とがある。しかも稱名は觀仏の中に含まれるべきものであって、稱名自体独立してあるべきものではない。人間の機根の劣っている者のためにこそ、稱名は存在しているのであり、觀仏は稱名よりもすぐれている」と強調したところ、法然上人は『往生要集』の序文に「極楽浄土に往生するための教えとか方法は、今の世にかなったものでなければならぬ。念仏こそ正しくこの世の人たちに、かなった教えであるといえる。従って僧といわず在家の人、貴族も賤しい人であっても、この教えに帰依すべきである。私ごとき愚かな者は、なおさらのことです。そのため念仏だけで往生することができるとを前提に、それにかんた経論の文をいさか集めてみました」と記してある言葉を証拠に、稱名をもって根本としなければいけないと主張した。時に叡空が「私の師匠良忍も觀仏がすぐれていると仰せられた」といえば、法然上人はすかさず「良忍は先に生まれながら、まだそこまで気がついていなかったのです」と応酬する。こうして、あくまで法然上人は自説を固執してゆずら

ない。ついに立腹した叡空は、「生意気な小僧め」とばかり木に枕を投げつけたという。『往生要集』にすすめている往生浄土の行業は、それは念仏であっても出家者を対象としたものであって、在家者は除かれていた。法然上人が求めようとしていた教えは、在家者をも含めたすべての人々が救われる教えであって、特権階級を対象としたものではない。誰でもが修することのできるものでなければ価値がない。源信は往生浄土のためには念仏こそ大切であるといっているが、その念仏たるや口に阿弥陀仏のみ名をとえながら、心のうちに阿弥陀仏のみ姿とか、極楽浄土のありさまを観しなければならぬ。ここにまだ法然上人としては、納得しかねる。

『往生要集』にのみたよることのできない理由があった。

『往生要集』ばかりでなく、修行の合間に大藏經をいくたびも読みかえた。『四十八巻伝』という伝記には五たび読んだと記している。上人は、ある日、自分が書物を手にしなかったのは、木曾義仲が京都に乱入した日だけだと述懐している。それほど熱心に読書した。『往生要集』はいくたびも読んだことだろうか。それを手引きに、浄土教こそ末法の今の期にかなった法であることを知った法然上人は、さらに奈良に伝えられている、比叡山に伝わっている浄土教とは別の浄土教のあることを知り、そこにこそすべての者が往生できる

教えが記されていないかと思ひ、諸学匠を訪うことになった。保元元年のことである。

山を下った上人は、嵯峨の釈迦堂に参籠したのち、奈良に赴き興福寺の藏俊や華嚴宗の景雅といった人たちについて教えを聞いたが、ここで思いがけず永観の『往生拾因』に接した。永観は南山城にあった光明山寺を復興して、東大寺浄土教の別所とした僧で、『往生拾因』には「一心に阿弥陀仏のみ名をとええることを、必ず救われる正しい働き(正定業)と名付けている。何故ならば、この行こそ阿弥陀仏が誓われた本願にかなっているからである。それにひきかえ、阿弥陀仏を礼拝したり、無量寿經・観無量寿經・阿弥陀經等の三部經を誦誦することによって、浄土へ往生したいと願う行を補助の働き(助業)と呼んでいる。この正しい働き・補助となる働きは、いずれにしても阿弥陀仏の浄土へ生れる原因となるには相違ないが、それ以外のすべての働きは往生の行とはならないので、雑行と名付ける」とか、「念仏を行ずる人たちは、阿弥陀仏の本願を唯一のささえとし、心をひとすじにして、仏のみ名をとえよ」といって称名をすすめている。観仏よりも称名。称名に重心をおいていることは、『往生要集』よりも『往生拾因』が一步さきんじていることを物語っている。とすれば、それは何にもとづいて称名重視の態度を

とるようになったのであろうか。それはいうまでもなく、中国(唐)の善導大師の書かれた『観經疏散善義』であつた。

この上は是非とも『観經疏』に目を通したい。『観經疏』を見なければならぬという一事は、法然上人が南都遊学によつてもたらした最大の成果であり、その結果『観經疏』を宇治平等院の法藏で見たという。『観經疏』には

一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に

と書かれていた。ただひたすら阿弥陀仏のみ名をとなえることによつて、極楽浄土に生まれることができる。念仏は歩いている時でも、床にふせている時でもよい。どこでなければという場所も問わなければ、方法も問わない。仕事をしながらとなえてもよい。となえええすれば十人が十人、百人が百人すべて往生できる。それは武士であらうが、女性であってもこばみはしない。これほど修しやすく、すばらしい方法が他にあるであらうか。この教えが専修念仏であり、これこそ今まで求めようとしていた理想のものであると知り、今まで修してきたものもろの雑行をなげ捨て、ただ一途に阿弥陀仏におすがりし、念仏申すことによつて往生できるという確信をかためた。承安五(一一七五)年春のことである。

五

比叡山で修すべきものを修し、学ぶべきものを学びつくして、専修念仏の法門を発見した法然上人は、黒谷別所をあとにして西山の広谷に移られた。ここで一先ず腰をおろした上人は、やがて東山の、今知恩院の建っている吉水の地に房舎を建てて民衆たちに布教したが、一時的にせよ西山に足をとどめたのは、ここに遊蓮房が住んでいたからであつた。「浄土の法門と、遊蓮房に会えるこそ、人界に生をうけたる思い出にては待れ」と、後年述懐しているところを見ると、遊蓮房には何かと感化をうけていたらしい。その遊蓮房が広谷にいる。先ず回心の事実を知らせなければということで、訪ずれたのではあるまいか。回心とは専修念仏によつて往生できるという確信をつかんだことであるが、この事実を知らせた法然上人は、一刻も早く悩み苦しんでいる人たちにも専修念仏の教えを知らせ念仏させたいと思い、東山に住房をしつらえて布教した。

それから八百年の世相を閲し、念仏は全国津々浦々の人たちにまで、知らぬ人はいないほどに弘まって今日におよんでいる。

浄土宗開宗八百年記念法要より

心のこる『声明の散華』

＝総本山知恩院式衆・法儀司＝

穴戸 栄雄

図

一

散華

名曲
こころ 出音微

願

我

在

道

場

昭和四十九年は、浄土宗が開かれて八百年になります。四月には知恩院で盛大な法要が勤められます。このため、私たちはもう大分前から、そのお稽古に入っています。

法要は一日五座の予定ですが、その「お日中」と「お違夜」の法要には、古い古い声明（しょうみょう）と呼ぶ「長い節の付いたお経」が唱えられます。

始めに出した図は、その中の一曲「散華」の古い譜本です。こんな簡単な譜で、十数分間の曲節が唱えられるのです。八百年も昔、法然上人が御在世の頃から、この譜は殆ど変わっていないようです。たったこれだけの譜ですから、何度も何度

も練習し、身体で覚えて伝えていったのです。

この長い声明が、或はテンポが早くなり、或は日本語で書かれた文章にも流用され、日本の音楽は発達して行きました。云わば、「声明」は日本音楽の源泉とも考えられます。

明治維新の後、我が国は外国の文化を取り入れるのに忙しく、古来の物はまったく省られませんでした。そして、ごく一部の特殊な人（もの好きとか変人と云われた人）に依ってほそぼそとその命脈を保っていました。

昭和の初め、ある音楽の先生が、知恩院の「御忌法要」に参って来られました。

西洋の音楽ばかりを習ったり教えたりして居られたその先生は、長く長く声を引いて唱えられている声明の「散華」を聞いて、大きな感銘を受けました。

「僧侶に依って唱え継がれ、あらゆる邦楽の母胎となった声楽」と、わずかに書物に記載されていた声明。それを初めて自分の耳で聞いた感動は、しばらく席を立ちかねる程でした。

その後、「知恩院の」と云うより「浄土宗の声明」、その本家「天台宗の声明」について調査した処、

○譜が簡単のため、口から耳へ伝唱されていること

○その結果、個人差が多く、いくつかの系統が出来ている

こと

○若い人は殆ど関心がなく、古老と共に滅亡する恐れがあること

○天台宗では「多紀道忍」と云われる方が一方の統首格であること

などが判明しました。

「あの日本人の心を捕えた声明を、何とか正しく後世に残さねばならない。」

このためにはレコードに吹込んで残すか、録音機が普及していなかった当時としては正確な楽譜で書き残すより外はありませんでした。

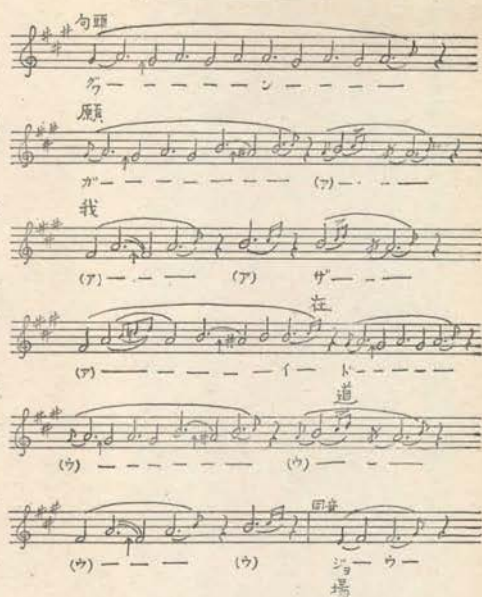
それで多紀師に頼み、何度も唱えてもらって「洋楽の譜（オタマジヤクシ）」で書く事にしました。

古譜本の上では、一応声の高さを指定してありますが、実際の法要ではその場の都合で高低不定、息いっばいに声を伸ばして唱えるので長さ、テンポが決めにくい。一度書きあげた譜も次回には一部訂正。後日、回を改めると書きなおし。実に数回、数十回の手間がかけられました。

こうして、あの記念すべき散華が一番先に譜に書きあげられました。

それから長い年月がたちました。この先生と多紀道忍師の

散 華 乙 様 図 二



たゆまぬ努力は続けられ、一曲、一曲と譜は書きあげられてゆきました。平常唱えられるものは良いのですが、何年に一度か、今はもう唱えられていない曲は大変です。多紀師自身も古譜を調べ、記憶をたどらねばなりません。血のにじむような努力が続きました。

昭和十年の暮、こうして書かれた譜は一冊の本『天台声明大成・上巻』となって刊行されました。その他の数十曲の譜は下書きのまま多紀師は他界され、日本は戦争へと突入し

て行きました。

残されたものは何時出版できるか、見通しは全く無くなりました。空襲のせまる京都で、先生の不安は高まりました。「この草稿だけは失いたくない。」こうした考えから、原稿の一本は比叡山へ、一本は更に安全な場所に。そして写しの一本を手もとに残し、警報下の自宅で古文書と照合し、訂正を加えて居られました。

その頃の先生にとっては「声明を採譜して後世に残す」とだけが、生き甲斐であったのです。

やっと終戦。しかし物資欠乏の当時、とても出版など出来ることはありませんでした。「いつか日の目を見る時もあるう。その日まで。その日まで。」老骨に鞭うって校訂は続けられました。

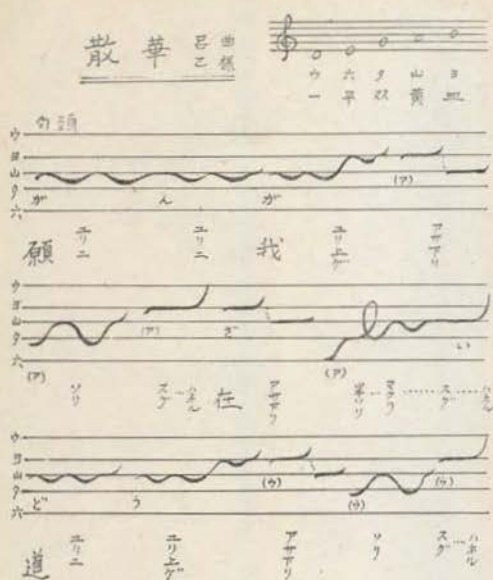
(以上は吉田恒三先生の生前の御述懐です)

その頃、私はある事情から「是非声明を習っておきたい」と考え、吉田先生の許へ通うようになりました。先生も非常に喜ばれ、定刻前には机や本を出し、正座して待っていられるのが常でした。

その第一回。

「私は老齢で声もしわがれ、息も続かないので唱えることは出来ません。しかし聞いて採譜した当人ですから、耳だけ

曲 呂 華 散



は確かだと思っています。本を見て唱えてください、間違
たら直しますと、ブツツケ本番に本を上げられた時は驚きま
した。恐る恐る声を出すと、ピアノやお手造りの一絃琴で高
低を正されたり、「こんな風にマルミを持って」と短いエン
ピツで絵を書いて説明されました。こうして少しずつ習得し
てゆきました。

昔の譜では分り難い。洋楽の譜では独特のマルミが表現し難い。これに困って、私は遂に図三のような譜を書いてみま

した。

声の高低、強弱、なめらかさ等、一歩前進出来たと思っています。先生もこれは便利な物を考えたねと褒めてくださいました。

これに時間的な要素が正確に書きこめたら、更に良いがと
考えています。

こうして、大切ではあるが、取付き難いと云われていた「邦楽の源泉」は、ずっと我々の身近かなものになって来ました。

来年の四月、知恩院で勤められる「開宗八百年慶讃法要」には、十余の漢文を十五分もかけて唱える「散華、伽陀、梵音等」や、一息でテンポ良く五字、七字を読むもの「礼讃、五念門」更に日本語に節を付けたもの。「御諷誦」。数千字を五分程で読んでしまうもの「阿弥陀経の説誦」まで、いろいろの唱えもの、読み物が出揃います。昭和三十六年以来のことです。邦楽の源流を聞く、またと無い機会になるでしょう。

右の諸曲のうち、日によって唱えられないものもありま
す。心ある方はよくお調べになって、自分の耳で「なまの
声」を聞かれるのも、この法要の意義ある一面でしょう。



華頂宮の和歌

我が祖山は、慶長十二（一六〇七）年に徳川家康の奏請によって皇族中より知恩院門主を迎えることになった。これが有名な知恩院宮とも華頂宮ともいわれるものである。つまり一宗の統緒をせられるものである。元和元年九月、後陽成天皇の第八皇子直輔親王が入室得度された。この方が宮門跡初代の良純法親王である。そして幕府は知恩院境内下段の北部に宮室を設けて、門跡領を千四百石を附した。良純法親王について、尊光・尊統・尊胤・尊峯・尊超・尊秀法親王が相繼いで入室された。尊秀法親王は、慶応三年十二月に復飾されたので二六〇年間つづき、長く浄土一宗の首座であった。結局、維新期に廃絶になったわけであるが、以後は寺領も全部上地

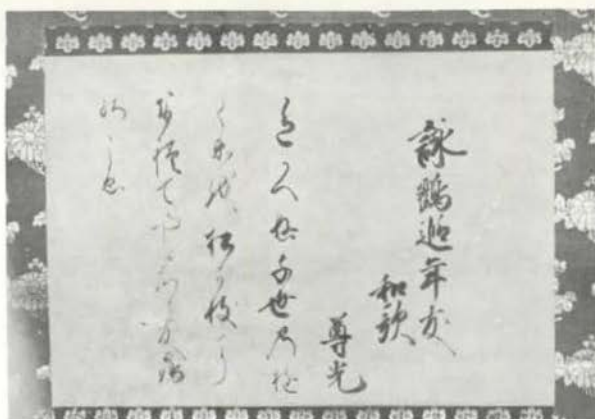
されて、祖山も一時窮乏した。しかし明治十九年に、知恩院貫首門跡号の公称を受け、現在もなお御門主を御門跡とおおぐのは、ここにはじまっている。しかも明治二十年には門主をもって浄土宗の管長とされた。

それはともかく、ここに掲げた写真は尊光法親王と尊胤法親王の書である。三行書いて四行目の三字は万葉仮名で書くという定法も私自身、この時の調査ではじめて教示をえたものである。知らないということは誠に都合のよいことである。

華頂宮関係のこの一連の書画などは当然、知恩院に所蔵されなければならないと思う。けれど現蔵は芝の増上寺である。しかも三十点以上まとまっている。いろいろな理由はあるが由緒のある場所にあつてこそ、これらの価値があるのではなからうか。現在知恩院の諸資料も宝蔵などの整備も進んで、その管理もよくなつてきている。宗内寺院もそうありたいと思う。近世初期から明治にかけての江戸期は歴史上種々な問題点が多い。だからこそ種々の資料が大切になつてくるのは当然であるが、何としても文化財の重要性の認識は、我が日本人の「よさの証拠」にならう。やはりそれが個人個人の自覚にもつながらう。

（田中祥雄）

尊光法親王筆



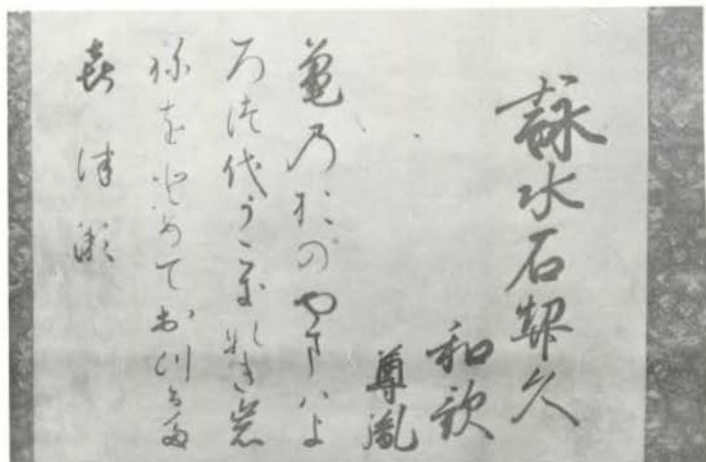
詠水石架久

和歌

尊胤

龜乃木のやうな
万代うゑまき
心をやめておひ
あはれ

尊胤法親王筆



「浄土」購読規定

一部 定価 百円

(送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円

(送料 不要)

浄土

五月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十八年四月二十五日

印刷

昭和四十八年五月一日

発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

大正大学助教授 宮 林 昭 彦 著

B6判 96頁 定価 160円 (200部以上 140円)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

1. 法然上人の時代と出家
2. 求道生活
3. 専修念仏の確信
4. 新しい救済
5. 晩年の法然上人

第二編 浄土宗のおしえ

1. 浄土宗を開かれたわけ
2. 末法と人間
3. 万人平等の救い
4. 選択のおしえ
5. 浄土三部経
6. 阿弥陀仏と浄土
7. 浄土宗の真髄

第三編 信徒の心得

1. 浄土宗の年中行事
2. 仏事の手びき

法然上人略年譜・参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。お申込みはお早目をお願いいたします。